GMAT

Gunma Museum of Art,
Tatebayashi

群馬県立館林美術館

群馬県立館林美術館 研究紀要 第6号

Bulletin of Gunma Museum of Art, Tatebayashi no.6

令和5年度 / 2023-2024

群馬県立館林美術館所蔵フランソワ・ポンポン関連資料について
―（1）写真資料、家具・オブジェ類
松下和美

Archival Materials Regarding François Pompon in the Collection of Gunma Museum of Art, Tatebayashi ― [1] Photographs, Furniture, and Objects (Summary)
MATSUSHITA Kazumi

目次［Contents］

群馬県立館林美術館所蔵 フランソワ・ポンポン関連資料について
—（1）写真資料、家具・オブジェ類

松下和美

Archival Materials Regarding François Pompon in the Collection of Gunma Museum of Art, Tatebayashi
— [1] Photographs, Furniture, and Objects (Summary)

MATSUSHITA Kazumi

群馬県立館林美術館所蔵 フランソワ・ポンポン関連資料について
― （1）写真資料、家具・オブジェ類

松下和美

はじめに

1　ポンポン関連資料（「アトリエ一式」資料）の収蔵経緯 ――― p.3

2　ポンポンのアトリエと資料について（概要） ――― p.4

3　ルネ・ドゥムリスについて　――― p.5

4　フランス国立自然史博物館の「ポンポン美術館」 ――― p.7

5　ポンポン関連資料より―写真資料　――― p.10

A　フランソワ・ポンポンのアトリエ関連写真
B　フランソワ・ポンポンの肖像写真
C　人物・風景写真
D　動物写真
E　フランソワ・ポンポンの作品写真（人物・鳥類）
F　フランソワ・ポンポンの作品写真（四足動物）
G　フランソワ・ポンポンの作品写真（複数作品）
H　その他の写真

6　別館「彫刻家のアトリエ」とポンポン関連資料より―家具・オブジェ類　――― p.22

a　別館「彫刻家のアトリエ」について
b　家具・オブジェ類

ポンポン関連資料リスト　――― p.27

Archival Materials Regarding François Pompon in the Collection of Gunma Museum of Art, Tatebayashi
― [1] Photographs, Furniture, and Objects (Summary) ――― p.45

Liste des archives François Pompon　――― p.48

はじめに

当館では、館のテーマである「自然と人間の関わり」を代表する作家として、20 世紀前半フランスの動物彫刻家フランソワ・ポンポンのまとまった作品･資料を所蔵している[1]。ポンポンの作品は、企画展示やコレクション展示で活用し[2]、2008（平成 20）年には特別展示「フランソワ・ポンポン」、2021～22（令和 3～4）年に開館 20 周年記念として「フランソワ・ポンポン展　動物を愛した彫刻家」を開催、館外への貸出も行ってきた。ポンポンの作品コレクションの情報については、制作年、来歴などをまとめた作品目録を作成[3]、2023 年 3 月末からはインターネット上の所蔵作品データベースでも基本データを公開している[4]。

一方、資料については、開館時に別館の「彫刻家のアトリエ」（図 1）において、彫塑台や家具類などをその他の再製作物と合わせて公開し、2009 年からは、「彫刻家のアトリエ」のケース内で主にドキュメント類を調査研究に基づき様々なテーマで紹介している。また特別展示や開館 20 周年記念展などの展示でも、ポンポンが参考にした動物の写真や絵はがき、ポンポンの使用した道具など、作品や作家の理解を深める手がかりとして紹介してきた。ガイドブック『フランソワ・ポンポンを知る』でもそれら主要資料を掲載している。

しかしながら、ポンポン関連資料は、ジャンルが多岐にわたり、1000 点を超える点数があるため、これまで公開・紹介していないものもある。そこで本稿では、資料全体の分類と情報整理を行うことを目的とし、重要な資料については内容や位置づけについて触れ、過去の発行物で記述していない情報や、新たに分かった情報も加えながらまとめていきたい。

図 1　別館「彫刻家のアトリエ」

---

[1] フランソワ・ポンポンの作品購入経緯については、松下由里「群馬県立館林美術館の所蔵品について」『群馬県立館林美術館所蔵品目録』群馬県立館林美術館、2011 年、pp.6-8
作品購入は、1995 年 1 月に「県立東毛美術館（仮称）基本構想検討委員会 」（委員長：中山公男）で提示された基本方針に基づき始まる。テーマは当初「人・動物・花」、2000 年に「自然と人間」に修正されて購入が進められ、ポンポンの作品は、1995 年 3 月から 1998 年 5 月までの間に数度にわたり購入された。

[2] 当館におけるポンポン作品紹介の歴史については、神尾玲子「群馬県立館林美術館とポンポン」『群馬県立館林美術館 20 年の記録』群馬県立館林美術館、2021 年、pp.28-30

[3] パンフレット『フランソワ・ポンポンの人と作品』（2008 年）、『群馬県立館林美術館所蔵品目録』（2011 年）に掲載後、ガイドブック『フランソワ・ポンポンを知る―群馬県立館林美術館 作品・資料コレクションより―』（群馬県立館林美術館、2021 年[以下、『フランソワ・ポンポンを知る』と表記]）で一部を修正して再録（大理石、ブロンズ（生前鋳造）、石膏、他の彫刻、デッサンの 67 点を掲載）。

[4]「群馬県立館林美術館収蔵作品検索」よりフランソワ・ポンポン作品一覧
https://jmapps.ne.jp/tatebayashi/sakka_det.html?list_count= 10&person_id=1

1　ポンポン関連資料（「アトリエ一式」資料）の収蔵経緯

まず本稿で扱うポンポン関連資料とは、当館の開館前に「アトリエ一式」としてまとめて収蔵した一連の資料を指す（開館以降に入手した文献等の関連資料は、【参考資料】として記載する）。この「アトリエ一式」資料は、ポンポンの作品収蔵の一環で 1995（平成 7）年に収蔵したものである[5]。「アトリエ一式」資料は、ポンポンのアトリエに関連する資料を多く含み、来歴は、ポンポンの遺言執行人のルネ・ドゥムリス（René Demeurisse）の遺族である。

収蔵時、「アトリエ一式」資料は以下のように分類された。

I　「作品」
- a　ポンポンの石膏作品 32 点
- b　ルネ・ドゥムリスの絵画など平面作品 6 点

II 「鋳型」16 点

III「アトリエ資料」
- a　家具調度類 49 点
- b　道具類 47 点
- c　写真・ポスター7 点
- d　書籍類 64 冊
- e　手紙類

収蔵後、資料のうち I-a のポンポンの石膏作品 32 点は作品として分類された。III-a 家具調度類、c 写真・ポスターの一部は、別館の「彫刻家のアトリエ」に用いられ、その他は収蔵庫に保管し、前述の通り、調査研究・展示に活用してきた。収蔵時、様々なドキュメント類は e にひとまとまりとなったが、その中にはポンポンの手帳、c に漏れた写真資料や、ポンポンが集めていた絵はがき、新聞・雑誌の切り抜きなどの重要な資料も多数含まれている。そこで本稿では、I-a 以外のすべての資料を再分類し、資料データを整理することとする。新たな分類としては、家具・オブジェ、石膏資料、道具、型、写真、手帳、手紙、名刺、絵はがき、新聞・雑誌の切り抜き、ポスター、文献となるだろう。

分析にあたり基本として参照する情報は、1994 年刊行のカタログ・レゾネなどの文献や[6]、2000 年の当館開館前に行われたポンポン研究の第一人者リリアーヌ・コラ(Liliane Colas)氏による調査時の記録、文献上のアトリエに関する記述などである。ただしカタログ・レゾネは発行から 30 年がたち、未掲載の情報や、一部修正が必要と考えられる箇所も見つかっている。情報の訂正をしながら、リリアーヌ・コラ氏に新たにご教示頂いた情報もあわせて記していきたい。

---

[5] 1995 年 10 月の専門委員会を経て、同年 11 月 30 日に登録された。

[6] Catherine Chevillot, Liliane Colas, Anne Pingeot, *François Pompon 1855-1933*, Réunion des musées nationaux, 1994. [以下、本文では「カタログ・レゾネ」、文献中は *François Pompon,* 1994 と表記]

手帳他の資料については以下の論文がある。
Marie Lembacher, *Le fonds Pomppon et les collectioneurs de l 'artiste à travers ses carnets de compte,* Mémoire de muséologie de l'Ecole du Louvre, 2006.

2　ポンポンのアトリエと資料について

ポンポンのアトリエについて詳しくは、後のセクションで資料を参照しながら触れることとし、ここでは、ポンポンのアトリエの歴史と資料の所在について、概要を記しておきたい[7]。

ポンポンは、1855 年にフランス中部のソーリューに生まれ、ディジョンの美術学校の夜学で学んだ後、1875 年にパリに出る。2 度の引っ越しを経て、1877 年よりモンパルナスのカンパーニュ＝プルミエール通り 3 番地にアトリエ兼住居をかまえ、亡くなるまでそこに住んだ。晩年の 1930 年には、大型作品の保管場所として、また来客を迎え作品を見せる場所として、同じ通りの 2 軒先となる 7 番地のアパルトマンにも部屋を借りてアトリエとした（参考：図 2、3）。

1933 年 5 月にポンポンが亡くなった後、ポンポンの遺言により、残された作品は国に遺贈される。作品は、フランス国立自然史博物館が収蔵、ポンポンのアトリエの家具や道具などの資料の一部は、遺言執行人のドゥムリスの提言により、自然史博物館内でアトリエを再構成するために移される。同館における作品展示とアトリエ再構成は「ポンポン美術館」と名付けられ 1934 年 1 月にオープン、その後、第二次世界大戦のため 1939 年に閉鎖された。ポンポンの作品は、1934 年の自然史博物館の収蔵後まもなく、地方美術館への寄託が始まり、1948 年には多くの作品が、ポンポンが若い時期を過ごしたディジョン市の強い希望によりディジョン美術館に寄託される。一方、アトリエ関連の資料は、戦後、ドゥムリスの手元に戻ったと考えられる。ルネ・ドゥムリスの死後、資料はドゥムリスの遺族に引き継がれ、一部が、1989 年と 1995 年にオルセー美術館に寄贈された。その寄贈に入らなかった資料の多くを当館が収蔵したことになる[8]。

図 2 【参考資料】絵はがき「パリ、カンパーニュ＝プルミエール通り」（当館蔵）

図 3 【参考図版】フランソワ・ポンポンのアトリエがあったことを示すプレート（パリ、カンパーニュ＝プルミエール通り 7 番地）

---

[7] ポンポンのアトリエの歴史については、カタログ・レゾネの他に以下を参照。Liliane Colas, « L'Atelier de Pompon en 1930 », *Bulletin annuel de l'Association François Pompon*, année 2012.

[8] オルセー美術館のポンポン関連資料については以下参照(最終アクセス：2024 年 3 月 20 日)
« Les fonds d'archives privées et fond documentaires anciens au Musée d'Orsay » ;
https://www.musee-orsay.fr/sites/default/files/2023-01/Fonds_Archives_MO_Pr%C3%A9sentation_20220106.pdf
« Fonds Pompon - René Demeurisse » :
https://www.musee-orsay.fr/sites/default/files/2022-06/IR_Pompon_2015.pdf
1989 年、ドゥムリスの遺族は、27 点の石膏作品とともに、ポンポンのアトリエおよびドゥムリス由来の資料（手紙、会計帳 2 冊、個人手帳、クロッキー、写真、新聞雑誌切り抜き、雑誌、カタログ、絵はがき、展覧会評等）を、1995 年には 2 冊の手帳と 26 点のクロッキーを、オルセー美術館に寄贈した。その後、2006 年にも手帳 1 冊を寄贈している。また、2012 年、フランスのポントワーズの売り立てに、旧ルネ・ドゥムリス・コレクションのポンポン旧蔵書籍が出ている。1989 年の寄贈については、以下にも言及がある。
De Manet à Matisse : Sept ans d'enrichissements au musée d'Orsay, catalogue d'exposition, Réunion des musées nationaux, 1990, p.240.

3　ルネ・ドゥムリスについて

「アトリエ一式」資料について知る上で、元の所有・保管者であったルネ・ドゥムリス（1895-1961）がどんな人物であったか知っておくのは有効であろう。ドゥムリスは、パリのサロンに風景画を主に出品した画家である。1919 年以降、ポンポンと交流し、1933 年のポンポン死後は遺言執行人としての仕事に多くの時間と情熱を注いだ。ここでは、いくつかの文献をもとにドゥムリスの生涯とポンポンとの関わりを辿っておきたい[9]。

ルネ・ドゥムリスは、1895 年、パリに生まれる。父は医者、母はポーランド出身の貴族だった。1913 年にグランド・ショミエールに入学、リュシアン・シモン(Lucien Simon)やエドモン・アマン＝ジャン(Édmond Aman-Jean)のもとで絵を学び始めるが、翌年、第一次世界大戦従軍のため学業の中断を余儀なくされる。大戦後の 1919 年、美術学校に戻るとともにサロン・ドートンヌの会員となった。

ドゥムリスがポンポンに出会ったのはこの年である。ドゥムリスの妻ジャンヌ（1897-1997）が後年記した回想[10]によると、ドゥムリスは、美術批評家ロベール・レイ（Robert Rey）の妻から、若くして戦争で亡くなった J.G.レイの墓石の制作を依頼され、彫師を探していた。この時、知り合いの彫刻家から紹介されたのがポンポンであった。1919 年 10 月 12 日、ポンポンに仕事を依頼した[11]この日以降、ドゥムリスはポンポンのアトリエに通い、生涯、交流を続けていくことになる。

ポンポンとドゥムリスの関係性は年齢から推察できる。二人が知り合った時、ポンポンは 64 歳、ドゥムリスは 24 歳であった。ドゥムリスは、父のようにポンポンを慕ったと伝えられる。ドゥムリスと出会った 1919 年は、ポンポンにとっては、第一次世界大戦のために中断していた動物観察を再開した頃にあたる。40 代終わりまでポンポンは、他の彫刻家の下彫りの仕事を行っており、自身の作品として動物彫刻の発表を始めたのは 1906 年、50 歳を過ぎてからである。小さな動物彫刻は愛好家の間での少数販売にとどまり、大戦中は彫刻家の手伝いの仕事もなく、生活に困窮するほどだった。動物彫刻家として大躍進を遂げるのは 1922 年だが、実はそのきっかけを作り、晩年の活躍を陰で支えた一人がドゥムリスだった。

1919 年からポンポンのアトリエに出入りするようになったドゥムリスは、ある時、薄葉紙に包まれた動物彫刻の試作を見せてもらうと驚き、≪シロクマ≫を実物大で作ることをポンポンと話し合った、とドゥムリスの妻は記している[12]。そして自身が会員（sociétaire）で、作品設置係（placeur）でもあった、サロン・ドートンヌの審査員に作品の写真を送り、出品の認可を取り付けた。この時、中程度の大きさと認識されたため、展覧会場に現れた実際の動物サイズの石膏による真っ白で大きな≪シロクマ≫は、人々を驚かせることになった。ドゥムリスが写真を送ったエピソードは、同時代の評論書でも記されている[13]。

---

[9] 主な文献は以下。Pierre Cailler, *René Demeurisse 1895-1961,* Les cahiers d'Art-Documents, n°258 , 1969 ; Claire Maingon, « Lettre inédites à René Demeurisse（1895-1961), placeur au salon de la société nationale des beaux-arts en 1921 », *Conserveries mémorielles*, 2007 ; *René Demeurisse, Peintre dans les tranchées, Croquis et lettres 1914-1918*, Édition établie et présentée par Nathalie Sokolowsky-Demeurisse, Édition Imago, 2016 ; [Catalogue de ventes] *François Pompon (1855-1933), Un sculpteur d'avant-garde et l'école amimalière du XXe siècle,* Aponem, Pontoise, 2012.

[10] 1994 年に記した手稿からの抜粋が掲載されている。« Souvenirs de Jeanne Demeurisse », *ibid.,* [Catalogue de ventes], 2012, pp.13-15. なおジャンヌがルネと出会ったのは、1923 年、ポンポンのアトリエだったことも記されている。当館のポンポン関連資料の中にこのジャンヌの手稿（コピー）がある。

[11] 墓石は、ドゥムリスが下絵を描き、ポンポンが彫った。*François Pompon,* 1994, p.113（図版 No.154）

[12] « Souvenirs de Jeanne Demeurisse », *op. cit.,* p.13.（註 10 参照）

[13] Robert Rey, *François Pompon*, Les Éditions G.Crès & Cie, 1928, p.43.

交友関係の広かったドゥムリスは、ポンポンの重要な作品販売も取り持った。≪シロクマ≫の国による収蔵を働き掛け、当時リュクサンブール美術館学芸員となっていたロベール・レイと共に材料となる石の準備に奔走、ドゥムリスの知り合いのジャーナリストで『新しいヨーロッパ（Europe Nouvelle）』紙創刊者のルイーズ・ワイス（Louise Weiss）を介して、アメリカ人銀行家からの資金提供を取り付ける。こうして 1929 年に、今日オルセー美術館に所蔵される大型の≪シロクマ≫が誕生した[14]。

≪大鹿≫の大型ブロンズ作品（現、オルセー美術館所蔵、ルベ、ラ・ピシーヌ アンドレ・ディリジャン美術産業博物館寄託）も、ドゥムリスのパトロンだった実業家の注文で誕生したものである。注文者は、フランス南西部、バス＝ピレネー地方で公共事業を担う土木会社を経営していたテヴノ(Thévnot)である。テヴノは、芸術家支援に関心があったのだろう、1927 年にはドゥムリスをピレネーに滞在させ、風景の写生滞在をさせている。1929 年 5 月、テヴノはドゥムリスに連れられてポンポンのアトリエを訪れ、石膏の≪大鹿≫を見て大型ブロンズを注文した。完成作は同年のサロン・ドートンヌに展示された後、翌 1930 年 5 月に注文者のもとへ輸送され、ポンポンとドゥムリスは二人で、作品設置のために現地を訪れた。再び妻ジャンヌの手稿を参照すると、テヴノの野外プール脇に置かれた≪大鹿≫が、ピレネーの山を背景に胸を張る美しい姿について記され、また、作品の代価として 10 万フランの大金の入ったトランクを受け取り、帰路、二人はトランクを枕にして交代で寝ずの番をした、といったほほえましいエピソードも綴られている。

ドゥムリスによる作品購入の仲介には日本人が登場することも付記しておきたい。1920 年、パリに留学中だった皇族の一人、東久邇宮稔彦王がドゥムリスを介して作品を購入した記録がポンポンの手帳に残されている[15]。ドゥムリスはアマン＝ジャンの紹介で東久邇宮と知り合い、フランス語を教えていたようである[16]。これは≪シロクマ≫誕生以前の、初めての日本人によるポンポンの作品の購入となるだろう。ただし国内で発行されている東久邇宮の文献では、ドゥムリスやポンポンの名は登場しない[17]。購入作品が何であったか、またその行方も不明である。

ドゥムリスは、ポンポンを慕い、アトリエに集った若い作家たちの一人であった。ポンポンと彼らは、連れ立ってモンパルナス大通りの食堂に繰り出し、共に食事を楽しんだ後、またアトリエに戻って夜中まで美術の話をするというような親しい交流があった。ポンポンの動物彫刻は、若い彫刻家たちに影響を与え、動物園の動物観察も共にする作家も多くいた。そうした中で、ドゥムリスは、画

---

[14] *François Pompon,* 1994, p.81.

[15] オルセー美術館所蔵のポンポンの会計帳中、1922 年 1 月（または 4 月？）17 日に、ポンポンは、「Comte Higashi」宛てに、作品の代金をルネ・ドゥムリス から受け取った、とお礼を述べる手紙の下書きを残している。*François Pompon,* 1994, p.124.

[16] Claire Maingon,*op.cit.,* p.2.

[17] 東久邇稔彦『やんちゃ孤独』読売新聞社、1955 年、pp.95-98（『皇族軍人伝記集成第 11 巻』ゆまに書房、2012 年に再録）。戦後は皇室出身の総理大臣を務め、激動の生涯を生きた東久邇宮に関係する未刊行文書へのアクセスは容易ではない。自著は自己弁明の目的もあったため、内容の真偽に疑問も呈されている。また、所蔵の書画作品は戦後、売られたとの情報がある。
伊藤之雄『最も期待された皇族　東久邇宮　虚像と実像　1887～1931 年』2021 年、pp.63-65

家だったからだろうか、ポンポンを支える側にいた点で他の作家たちとは異なっていた。

さて、ポンポンがドゥムリスのような若い作家に対してどう思っていたのか、その気持ちをうかがい知ることのできる言葉が、日本人画家の岡見富雄（1890-1965）によって伝えられている。岡見は、1919 年よりパリに留学し、アマン＝ジャンに師事、師を通してドゥムリスと知り合い、さらにポンポンとも知り合っていた。岡見が妻と共に 1930 年頃にポンポンのアトリエを訪れた際にポンポンが語った言葉を伝えている。「五十有余年毎日土をいぢらぬ時は無い、七十近くになつて少し売れる様になつた、これも若い人達が自分を押出して呉れたのです、自分は若い者からその若さの感じる力を習ひ度い」。岡見はこう語ったポンポンの心の気高さに感心している。またドゥムリスについても触れ、「彼は畫の話になると無中になり、又憤慨し、巻煙草を逆様に火のある方を口に入れやけどをしました」と情熱的な性格を伝えている[18]。

1933 年、ポンポンが 77 歳で亡くなった時、ドゥムリスは 37 歳だった。ドゥムリスはその後、画家としての活動も続けたが、それについては別の機会に譲ることとし、次に、1961 年に亡くなるまで約 30 年間のポンポンの遺言執行人としてのドゥムリスの行動とポンポンのアトリエ資料について触れたい。

4　フランス国立自然史博物館の「ポンポン美術館」

ポンポンは、1929 年 5 月、74 歳の時に遺言を記し、その最後に遺言執行人としてドゥムリスを指名した[19]。ドゥムリスがそのことを知ったのは、1933 年 5 月 6 日にポンポンが亡くなった直後であったという。公証人に呼び出されたドゥムリスは、事実を伝えられ驚いた、と妻は記している[20]。その後ドゥムリスは生涯をかけてポンポンの作品の管理と普及に情熱を注いでいくこととなる。

ここから少し複雑になるが、ポンポン死後、作品がどのような道筋でフランスの機関に収蔵されていったのか、あわせて記していきたい。ポンポンは遺言の中で、作品について「私は死んだときに存在するすべての彫刻、すなわち原型、ブロンズ、石、石膏、他のすべての材質の作品をフランス国家に遺贈する」と記した[21]。当時、現存作家はリュクサンブール美術館が収蔵しており、作家が亡くなると、作品は 10 年後にルーヴル美術館に収蔵されることになっていた。リュクサンブール美術館に何点か収蔵のあったポンポンの場合、国への遺贈となれば 10 年後にルーヴル美術館に収蔵されることが想定された。しかし、その 10 年間の空白期間を懸念した教育・美術大臣のアナトール・ド・モンジー(Anatole de Monzie)は、ポンポンの死後直後、作品を国立自然史博物館で収蔵することを提案する。ポンポンは毎日、植物園[22]に通い、彫刻家たちを導く役割を果たしたのだから、自然史博物館で収蔵するのが相応しい、との見解だった。生前からポンポンを知り、1933 年 1 月にはポンポンにレジオン・ドヌール勲章オフィシエ章を授与した大臣の個人的な思いも大いに含まれていたに違いない。

---

[18] 岡見富雄「彫刻家ポンポン」、『美術新論』1930 年 2 月号、pp.124-125

[19] *François Pompon,* 1994, p.84

遺言の中の遺言執行人についての記述は次の通り。「私は［略］に住む、友人で画家のルネ・ドゥムリスを、特に彫刻作品についての遺言の執行人とする。彼に感謝の意を込めて、私は彼が選ぶ一作品を遺贈するものとし、それにはすべての税と費用が免除される」。

[20] 当館のポンポン関連資料の中のジャンヌの手稿（コピー）。

[21] 註 19。

[22] パリの植物園（Jardin des plantes）の中に動物園(ménagerie)と国立自然史博物館(Muséum nationale d'histoire naturelle)がある。

そして同じタイミングで、ドゥムリスは、自然史博物館に新しくできたばかりのギャラリーに、ポンポンのアトリエを再現する提案の手紙を大臣宛てに送っている（1933 年 5 月 18 日）。

1933 年 8 月、提案が採択され、アトリエに遺された作品は自然史博物館での収蔵が決定、翌 1934 年 1 月 13 日に、国立自然史博物館の「植物ギャラリー（galerie botanique）」にポンポンの部屋が 2 室オープンした。一つは、大型の≪カバ≫や≪大鹿≫などの作品が並ぶ展示室、もう一つがポンポンのアトリエを再現した部屋である（図 4）。このポンポンの展示室は、「ポンポン美術館」と名づけられ、ドゥムリスは、その名誉学芸員に任命される。

27 Janvier 1934　L'ILLUSTRATION　N° 4763 — 107

Partie de la nouvelle galerie Botanique annexée au musée permanent François-Pompon.
Au premier plan, le Cerf ; au fond, le Taureau ; au milieu, le Cendier, dont une esquisse figure sur la corbeille de l'artiste, à droite.

UN MUSÉE POMPON AU MUSÉUM

Quelle merveilleuse vie que celle de François Pompon ! Elle évoque ces contes de fées où Cendrillon la déshéritée devient princesse.

Il était une fois... un petit garçon bien sage qui aidait au labeur de son père, menuisier dans la province. Comme il travaillait avec ceux, on voulut de lui faire un architecte. Mais il se passionna pour la sculpture et, tout en gagnant son existence en qualité de marbrier ou de tailleur de pierre, il se perfectionnait dans son art. Plus tard, sa persévérant l'astreignit à exécuter les travaux des autres et on le considérait comme un ouvrier bien qu'il ait fait montre en diverses occasions de son talent personnel. Il était déjà un vieillard, mais toujours jeune d'âme, lorsqu'on s'aperçut qu'il avait du génie. Celui qui avait été un petit garçon bien sage était un homme empreint d'une sereine philosophie et d'un goût sûr de la beauté. Une prudentielle sobriété ne changera rien à sa mode de constatée. Lorsqu'il mourut, on inédulla son œuvre dans un palais splendide, situé au milieu des bêtes que ce grand homme si simple avait aimées. Là, des foules vinrent défiler devant le legs généreux de ce créateur qui avait passé presque toute sa vie inaperçu. Et c'est là l'histoire de celui que notre confrère René Jean a si joliment nommé saint François Pompon.

C'est, en effet, au double titre du génie et de la bonté qu'on peut rendre hommage au maître disparu.

Nulle jalousie, nulle ambition, nulle soif d'honneurs ou d'argent n'eurent jamais place en François Pompon. Sa gentillesse envers tous les êtres et sa résignation vis-à-vis du destin arrangeant un cinqre imposé. Un jour où, devant lui, je déplorais sa trop tardive réussite, il eut ce mot d'une humilité évangélique : « J'ai encore eu de la chance. Il y a tant de gens du talent qui ne réussissent jamais ! » Puis, avec toute la lenteur de son cœur, il ajouta : « Je ne regrette qu'une chose, c'est que ma femme n'ait pas vécu suffisamment pour assister à mon succès. »

Mme Pompon n'avait jamais désespéré de l'avenir. Elle avait sans défaillance, contrôlé de son affection et de son dévouement l'artiste, qui ne méconnaît guère autour de lui qu'indifférence et incompréhension. C'est pourquoi l'idée de reconstituer fidèlement, au milieu de la magnificence des galeries nouvelles du Jardin des Plantes, l'étroit atelier dans lequel Pompon passa cinquante-quatre années de sa vie est si profondément émouvante.

Ce réduit de la rue Campagne-Première, Pompon l'avait loué en 1879. Il lui resta fidèle jusqu'à son décès jour. Dans le fond, il avait du sol mutre d'ancien menuisier aménagé une soupente dans laquelle se trouvait le lit du ménage. Sur le fourneau qu'on peut voir au Muséum, la compagne dévouée faisait la cuisine. Quel exemple de labeur tenace et honnête, d'abnégation devant la vie et d'intransigeante amour de l'art ! Félicitons-nous que, grâce au peintre Demeurisse, créateur instantanéiste de Pompon, les jeunes générations soient mises à même de connaître où et comment cet pu vivre avec sublime un esprit d'élite et la femme qu'il avait choisie.

Avec un soin pieux, René Demeurisse a dressé le plan des murs, disposé le mobilier clos, tout réinstallé à la place exacte où l'avait laissé le départ de Pompon. La plume est sur l'écritoire, dans la position même où les doigts du sculpteur l'eut abandonnée. L'illusion est telle, pour ceux qui connaissent Pompon chez lui, qu'on a l'impression qu'il va paraître avec son indulgent et ensoleillant sourire. Des amis rencontrent à la triste réalité de l'éternelle absence et leurs prunelles s'embuent d'une larme prête à se former. La galerie Botanique va-t-elle devenir l'occasion d'un pèlerinage sentimental ?

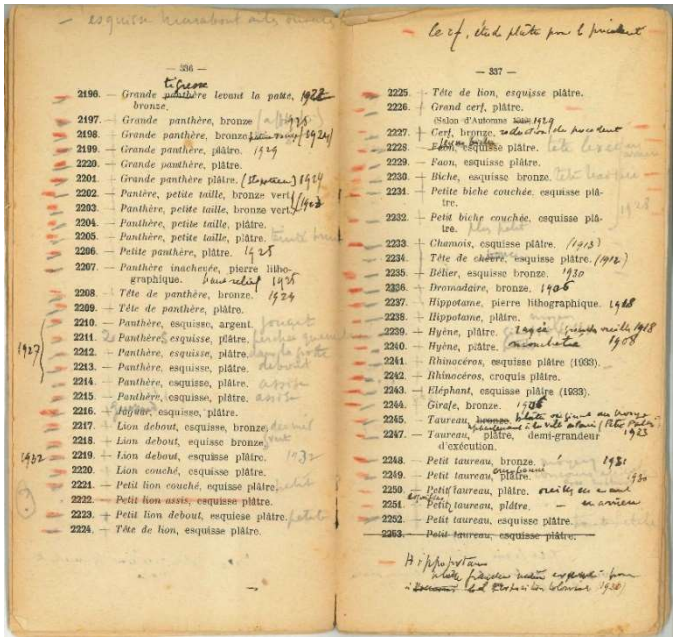
YVANHOÉ RAMBOSSON.

Reconstitution, dans ses dimensions réelles, de l'atelier occupé par François Pompon, 3, rue Campagne-Première, pendant cinquante-quatre ans.

図 4　『イリュストラシオン』1934 年 1 月 27 日号、p.107（当館蔵）

「ポンポン美術館」の仕事と並行して、ドゥムリスは、展覧会の企画、そして作品複製によるポンポンの顕彰と普及にも力を注いでいった。最初の企画は、1933 年 11 月のサロン・ドートンヌにおけるポンポンの回顧展である。この展示は、236 点もの作品が出品された大規模なものだった。注記しておきたいのは、この点数はポンポンが生前に発表した作品点数をはるかに上回る数だったということである。展示に多く含まれたのは、サロン・ドートンヌのカタログでは「エスキース」として列挙されている、形が整えられる前の石膏試作であった。おそらくポンポンの仕事を傍らでよく見ていたドゥムリスは、作品誕生にいたる各段階の仕事の痕跡を示したかったのであろう。当館には、ドゥムリス旧蔵のサロン・ドートンヌのカタログがあるが、修正やメモの書き込みがびっしりと入っており、記録を残そうとするドゥムリスの情熱と意思を感じさせる（図 5）。この展覧会出品作品が、後世のポンポンの作品保存の基礎になったと考えられる。

一方で、ドゥムリスの保存への情熱は、遺言執行人としての仕事の妥当性から逸脱させることにもなった。ポンポンは遺言で「私の



— 336 —

2196. — *Grande panthère levant la patte*, bronze.
2197. — *Grande panthère*, bronze.
2198. — *Grande panthère*, bronze.
2199. — *Grande panthère*, plâtre.
2200. — *Grande panthère*, plâtre.
2201. — *Grande panthère* plâtre.
2202. — *Panthère, petite taille*, bronze vert.
2203. — *Panthère, petite taille*, bronze vert.
2204. — *Panthère, petite taille*, plâtre.
2205. — *Panthère, petite taille*, plâtre.
2206. — *Petite panthère*, plâtre.
2207. — *Panthère inachevée*, pierre lithographique.
2208. — *Tête de panthère*, bronze.
2209. — *Tête de panthère*, plâtre.
2210. — *Panthère*, esquisse, argent.
2211. — *Panthère*, esquisse, plâtre.
2212. — *Panthère, esquisse*, plâtre.
2213. — *Panthère*, esquisse, plâtre.
2214. — *Panthère*, esquisse, plâtre.
2215. — *Panthère*, esquisse, plâtre.
2216. — *Jaguar*, esquisse, plâtre.
2217. — *Lion debout*, esquisse, bronze.
2218. — *Lion debout*, esquisse bronze.
2219. — *Lion debout*, esquisse plâtre.
2220. — *Lion couché*, esquisse plâtre.
2221. — *Petit lion couché*, esquisse plâtre.
2222. — *Petit lion assis*, esquisse plâtre.
2223. — *Petit lion debout*, esquisse plâtre.
2224. — *Tête de lion*, esquisse plâtre.

— 337 —

2225. — *Tête de lion*, esquisse plâtre.
2226. — *Grand cerf*, plâtre.
(Salon d'Automne
2227. — *Cerf*, bronze.
2228. — *Cerf*, esquisse plâtre.
2229. — *Faon*, esquisse plâtre.
2230. — *Biche*, esquisse bronze.
2231. — *Petite biche couchée*, esquisse plâtre.
2232. — *Petit biche couchée*, esquisse plâtre.
2233. — *Chamois*, esquisse plâtre.
2234. — *Tête de chèvre*, esquisse plâtre.
2235. — *Bélier*, esquisse bronze.
2236. — *Dromadaire*, bronze.
2237. — *Hippotame*, pierre lithographique.
2238. — *Hippotame*, plâtre.
2239. — *Hyène*, plâtre.
2240. — *Hyène*, plâtre.
2241. — *Rhinocéros*, esquisse plâtre (1933).
2242. — *Rhinocéros*, croquis plâtre.
2243. — *Eléphant*, esquisse plâtre (1933).
2244. — *Girafe*, bronze.
2245. — *Taureau*,
2247. — *Taureau*, plâtre, demi-grandeur d'exécution.
2248. — *Petit taureau*, bronze.
2249. — *Petit taureau*, plâtre.
2250. — *Petit taureau*, plâtre.
2251. — *Petit taureau*, plâtre.
2252. — *Petit taureau*, esquisse plâtre.
2253. — *Petit taureau*, esquisse plâtre.

図 5　ルネ・ドゥムリス旧蔵『サロン・ドートンヌ』カタログ 1933 年、p.336-337（当館蔵）

遺言を執行する者は、すべての凹型の鋳型、余剰の石膏は破棄するように」とし、死後の鋳造は望まない考えを示していた[23]。にもかかわらず、1933 年 8 月、ドゥムリスが、ド・モンジー大臣、ロベール・レイ、ルーヴル美術館彫刻部門学芸員ポール・ヴィトリ(Paul Vitry)、リュクサンブール美術館学芸員ルイ・オートクール（Louis Hautecœur）らの立会いのもと、ポンポンのアトリエ前の中庭で焼却した型や作品は、すべてではなく、「ドゥムリスが不要と思った」ものであった[24]。ポンポンを知る人々の間では、型や作品はできるだけ「保存」する方向に向かったということであろう。さらに、この時に残された石膏や型だけでなく、自然史博物館に収蔵された作品そのものから、初めは、国や団体、美術館の依頼で、後にはドゥムリスの遺族と鋳造所が結託し、死後の鋳造が行われていった[25]。

一方で、博物館や美術館の作品管理の基準は、物理的な制約と、より広い視野に置かれた。国立自然史博物館が受け入れた作品 215 点のうち半分以上は、早くも 1934 年 9 月に、ルーヴル美術館のヴィトリとリュクサンブール美術館のオトクール、そしてドゥムリスによって地方への作品寄託案が作られ、ブザンソン、ディジョン、グルノーブル、ナント、ルーアン、ソーリュー、ストラスブール、翌 1935 年にはリヨンの美術館に寄託された[26]。

アトリエの資料については、パリの美術館は引き取りに消極的だった[27]。1939 年、リュクサンブール美術館を引き継ぎ数年後の開館を予定していた国立近代美術館は、ポンポンの代表作（≪シロクマ≫、≪大鹿≫他）をすでに所蔵しており、アトリエ再構成のスペースはないとして資料の収蔵を拒否した[28]。同年、「ポンポン美術館」は戦争のために閉鎖され、作品は一時的にロワール地方の城館に避難されたが、アトリエ部分は現場に置かれたままとなる。

戦後、ポンポンの作品の収蔵に熱意を示したのは、ポンポンが 10 代後半で彫刻を学んだ町、ディジョンだった。生前のポンポンを知るディジョン市長フェリックス・キール（Féilix Kir）[29]は、作品誘致を熱心に行い[30]、ドゥムリスも自然史博物館への働きかけに協力する。その結果、1948 年 5 月、ポンポンの作品は自然史博物館に 20 点を残し、ディジョン美術館に寄託されることとなり[31]、ディジョン美術館 1 階にポンポンの展示室がオープンした[32]。

アトリエ資料の行方については、1994 年のカタログ・レゾネでは触れられていないが[33]、ディジョン美術館ではアトリエの再構成

---

[23] 註 19。

[24] *François Pompon,* 1994, p.92

[25] ドゥムリスが介した死後の鋳造は、国立自然史博物館の石膏も用いられている。

[26] ポンポンの作品の地方への寄託は、この後も続く。また、寄託された作品の一部引き戻しもある。近年の一例では、2016 年にディジョン美術館、ソーリューのフランソワ・ポンポン美術館寄託作品の一部が自然史博物館に引き戻され、さらに一部は人類博物館の展示に使用された。

[27] 1935 年、リュクサンブール美術館のオトクールは、「国立美術館に個人の芸術家のアトリエを再構成することは困難だ」と述べている。*François Pompon,* 1994, p.94.

[28] 註 7、Colas, 2012, *ibid.*

[29] フェリックス・キールは、司教座聖堂参事会員（chanoine）の聖職者だった人物で 1945 年から 1968 年に亡くなるまでディジョン市長を務めた。

[30] 1946 年に、ディジョン美術館学芸員のピエール・カレにポンポン作品獲得の任務を与える。

[31] 1960 年にディジョン美術館で開催された「フランソワ・ポンポン展」カタログでは、225 点の作品が掲載される。

[32] 1985 年には、旧宮殿バール塔にポンポンの展示室が新しくなって移る。また近年、ディジョン美術館の大改装により、ポンポン展示室は 2019 年に新しくなっている。

[33] 国立自然史博物館学芸員のヴェロニク・ヴァン・ド・ポンセルは、「ポンポン美術館」のアトリエは戦時、現場に残されていた間に「部分的に行方不明になった」と記している。Véronique Van de Ponseele, « Muséum national d'histoire naturelle », *François Pompon,* Éditions Faton, Dijon, 2020, p.84.

はされなかったことから資料はドゥムリスのところで保管されることになったと考えられる。2 で述べた通り、ルネ・ドゥムリスの死後、資料は遺族に引き継がれ、1989 年、1995 年にオルセー美術館に一部が寄贈、その他の資料が当館収蔵となったと思われる。オルセー美術館への寄贈資料はドキュメントが中心だったのに対して、当館が収蔵した資料は、ドキュメントに加え、「ポンポン美術館」のアトリエ再構成の物品や道具や型が含まれているのが特徴である。

以上で見てきた通り、当館「アトリエ一式」資料は、1933 年 5 月までポンポンが住んでいたモンパルナスのアトリエと、1934 年から 39 年まで国立自然史博物館にあった「ポンポン美術館」のアトリエ再構成の両方の歴史を含んだものであることを再確認し、ここからは、「アトリエ一式」資料の分類・整理の最初として、まず元のポンポンのアトリエの視覚的な情報記録を含む「写真資料」から取り上げたい。

5　ポンポン関連資料より―写真資料

写真資料（PH）は、写された対象物によって以下の通り分類し、現段階で総数 243 点と数えられた。

A　フランソワ・ポンポンのアトリエ関連写真（25 点）
B　フランソワ・ポンポンの肖像写真（11 点）
C　人物・風景写真（16 点）
D　動物写真（24 点）
E・F・G　フランソワ・ポンポンの作品写真（162 点）
H　その他の写真（5 点）

資料リストは本稿末に付し、以下では、主要な資料を抜粋して紹介する。

PH_A　フランソワ・ポンポンのアトリエ関連写真

アトリエ関連写真は全 25 点ある。このうちポンポンが住んでいた元のアトリエを写した写真は PH_A_01～08 である。

A_01～05 は、1877 年から 1933 年までポンポンが住居兼仕事場とした、カンパーニュ＝プルミエール通り 3 番地のアトリエ、A_06～08 は、1930 年に、ポンポンが同じ通りの 7 番地のアパルトマンに開設した新しいアトリエの写真である。撮影は、01～05 は、ドゥムリスがポンポンの死後直後の 1933 年 5 月[34]に撮らせたもので、撮影者はローズマン(Roseman)である（表または裏面にローズマンの名が入っているか、スタンプがある）。06～08 もローズマンの撮影と考えられる[35]。ポンポン生前にアトリエを撮

[34] 1933 年 5 月 18 日の教育大臣宛てにアトリエ再構成を提案する手紙に「アトリエの写真を撮った」とあるため、5 月 6 日から 18 日の間と考えられる。

[35] PH_A_08 のみローズマンの印はないが、写真の雰囲気から同時期の撮影であると考えられる。

った写真は、ポンポンがポーズを取っている数点以外には知られないため、このアトリエ写真は貴重な記録となっている。

なお、ポンポンのアトリエがあった３番地の建物は現存せず、外観の写真はカタログ・レゾネに掲載のある１枚が知られているだけである[36]。ポンポンの伝記[37]によると、ポーチから入った中庭の奥の建物の１階だったという。通りに面していないので、カンパーニュ＝プルミエール通りの古い写真でも（p.4、図２）見つけることは難しい。建物はもとは馬小屋で、後に臓物商の貯蔵庫として使われた場所だった。２階には屋根の張り出した木製の回廊があり、ポンポンはここの風情に故郷の実家を思い出し、気に入っていたと伝えられる。

アトリエ内部の様子については、≪シロクマ≫で有名になって訪れる人が増えるに伴い、様々な記事の中で伝えられており[38]、そうした記述は写真を見る上でも参考となる。アトリエは、縦に細長い１室で、幅は 3.25m、奥行きは 6.1m であった[39]。写真 A_01～05 は、その３面を写している。

A_01　部屋の正面奥を写した写真。寝床のあったロフトの飾り壁の前を煙突が横切っている。飾り壁に妻の肖像画が掛けられ、その後ろにロフトに上る梯子がある。画面右には、ヒイラギの葉が飾られた「シードル用圧搾機のネジ」が立てかけられ、近くに≪カラス≫や≪風見鶏≫が見られる。奥の棚には小型の石膏が多数置かれ、左の台の上にも、何種類かの≪鹿≫の他、おそらく色味から粘土と思われる≪ライオン「メネリク」≫や≪キンケイ≫（頭部欠け）の貴重な初期段階の形も見つけられる。

PH_A_01

PH_A_02

[36] *François Pompon,* 1994, p.84. 1930 年以降撮影の写真。

[37] Léone Pia-Lachapelle, *François Pompon, sculpteur bourguignon, sa vie, son œuvre,* Les Cahiers du Vieux-Dijon, 1988, p.29.

[38] 多数あるため、以下は文献の抜粋。
Henri Marcardi, « François Pompon ; sculpteur français », *Le Matin*, 4 août 1933, pp.1, 5 ; Rober Rey, « François Pompon, Sculpteur », *Mercure de France,* 1er Décembre 1933, pp.328-329 ; René Demeurisse, « Préface », *Catalogue Illustré des œuvres de François Pompon,* Édition de la Société des amis du Muséum, Paris, 1934, pp.5-10.
以下にも情報をまとめている。『フランソワ・ポンポンを知る』、pp.74-80

[39] 当館所蔵のポンポンの手帳（訪問者記録簿）に記載がある。

A_02　右手の壁を写した写真。上の方に風景画が飾られている。同時代の人が伝えるところによると、ポンポンの友人の画家たちによるものである[40]。その前に小さな石膏試作が並び、下には古い地図、ぶら下がった骨、棚の中にも動物の頭部などの石膏試作や道具類が詰められている。

A_03　向かって左奥を写す。作品以外では、コンロや鹿の骨、左奥には石膏レリーフが飾られている（p.22 参照）。コンロでポンポンは煮炊きをしており、冬に訪れた人は一緒にスープを飲んだと記述を残している。

A_04　左手の壁（上部）の飾り棚の写真。この棚は、ポンポンのアトリエを訪れた人がしばしば「ノアの方舟」と形容するものである。ポンポン自身は棚に並ぶ作品を「私の小さな動物たち」と呼んでいた。棚の最上部右には、≪シロクマ≫の表面が整えられる前の形、2 段目の右半分は、おそらく粘土による鶏やウサギの途中段階の形が見られ、造形の発展を辿る上でも貴重な情報が詰まっている。

A_05　左手側の壁（04 の写真の下）に置かれた机周りの写真。この机は、木工家具職人だったポンポンの父から譲り受けたものである。その父の肖像写真が中央に、上方には、妻の墓の写真が掛けられている。右上には、ロヒール・ファン・デル・ウェイデン≪最後の審判≫の複製が見られる。ブルゴーニュ出身のポンポンにとって、同じ地方の町ボーヌの施療院にある祭壇画に思い入れがあったのだろうか。机の右手は、ベルギー産硬石で彫られたポンポンの初期の≪モグラ≫、左手には石の≪ワシミミズク≫が置かれている。

PH_A_03

PH_A_04

PH_A_05

[40] 以下の記事で画家の名があげられている。Élise-Émile Magne, «Une heure chez Pompon », *ABC*, août 1929, p.272.

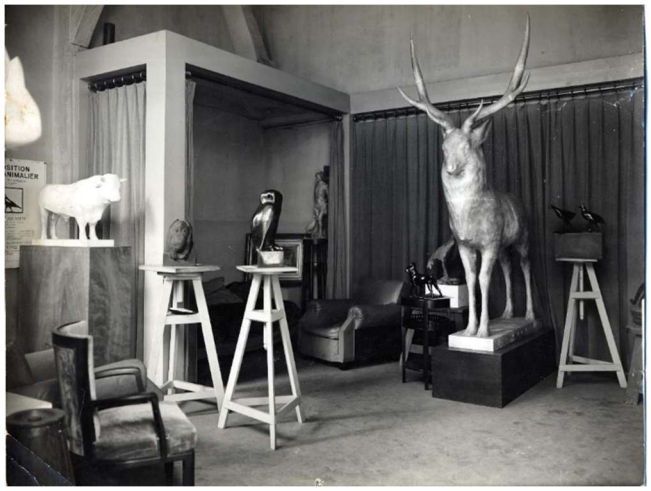
7 番地のアトリエは 2 室あったが、A_06〜08 は、そのうち 1 室をとらえている[41]。ポンポンの手帳には、部屋の大きさは幅 6.75m、奥行き 6m と記されている。このアトリエは、1930 年 5 月 2 日に開設され、毎週土曜日の 3 時以降に来客を迎えたところである。また大型作品の保管場所でもあった（なおこの新しいアトリエ開設の際に、ポンポンは 3 番地の方のアトリエの扉に、来客が迷わないようにと、≪シロクマ≫の頭部の彫刻を取り付けている）。

アトリエは二か所となったが、当時アトリエを訪問した人たちが記すところから、訪問者はまず 3 番地に行き、ポンポンに連れられて 7 番地に行ったり（親しくなれば連れて行ってくれる、と記す人もいる）、あるいは 3 番地に行ってポンポンが不在であれば 7 番地を訪れてみたり、という様子だったようである。天井高のある 7 番地の部屋には、大型作品を含む晩年の展覧会出品作が並べられ、窓からの採光もあり、作品がよく見えたのではないかと想像される。

A_06　中央の大型の≪カバ≫は、1930 年のパリ国際植民地博覧会出品のために拡大制作された石膏作品である（現在、国立自然史博物館蔵）。彫塑台の上には、妻ベルトの頭像やブロンズの≪大黒豹≫、右奥には中型の石膏≪大雄牛≫が見られる。

A_07　写っている作品は、左より、石膏の≪大雄牛≫、1930 年のサロン・ドートンヌに出品された黒大理石の≪オラン・ウータン≫、ブロンズの≪ワシミミズク≫、大型石膏の≪大鹿≫、ブロンズの≪ボストン・テリヤ「トーイ」≫、奥に≪バン≫、≪紅ヨーロッパやまうずら≫も並ぶ。≪大鹿≫は、1928 年に注文を受けてブロンズ鋳造のために作られた石膏原型である。

PH_A_06



PH_A_07

[41] もう 1 室については、いくつかの家具とテーブルが置かれ、ポンポンはそこで食事を取ったりしていたことが伝えられている。Paul Doncœur, « François Pompon, Animalier », *Etudes,* 5 février 1933, pp.318-324.

A_08　画面左より、大理石の台座付き≪シロクマ≫、≪休息するカンムリヅル≫、ガラスケース内は≪フクロウ≫などの小型作品、ケースの右に≪鳩「ニコラ」≫、≪ガチョウ≫などの鳥類、柱の上に≪ベルト・ポンポン≫の頭像が見える。鳥類の下にある引き出しの中には、ロダンから贈られた≪接吻≫のエスキース（PH_H_01）がしまわれており、ポンポンは訪問者があると大事そうに出して見せたことが伝えられている[42]。

A_09　この写真は、1994 年のカタログ・レゾネでポンポンの元のアトリエとして記載されているが、細部をよく見ると、国立自然史博物館の「ポンポン美術館」の写真であることが分かる[43]。その根拠の一つとなるのは、『イリュストラシオン』1934 年 1 月 27 日号に掲載された「ポンポン美術館」の写真である（図 4）。その記事が伝えるところでは、「ポンポン美術館」のアトリエは、ドゥムリスの熱意で、綿密な採寸のもとオリジナルと「すべてが同じように再構成された」。このため、見間違いやすいが、違いは、棚に並ぶ作品や机周りを飾る物などにある。

A_11 から 25 はドゥムリス宅で撮影された写真である。写っている資料の大半が、「アトリエ一式」資料として当館に収蔵された。例外として、カーテンにかかる猫のミイラ（(A_15（部分））のように含まれなかったものもある。この猫のミイラは、同時代の複数の人がポンポンのアトリエで見て印象に残ったことを記しているものである。

PH_A_08

PH_A_09

PH_A_15（部分）

[42] Raymond Henry, « Portrait : François Pompon », *Gringoire,* 12 mai 1933, p.3.

[43] カタログ・レゾネでは、PH_A_06 の写真も、誤って自然史博物館の再構成として記載されている。*François Pompon*, 1994, p.90.

PH_B　フランソワ・ポンポンの肖像写真

ポンポン自身の姿が写された写真は 11 点ある。年代が分かる最も古いものは、B_02 で、1925 年の美術雑誌[44]に掲載されていることから、70 歳前後と考えられる。

B_03 は、国の注文により 1928 年から 29 年に彫られた石の≪シロクマ≫を前にしたポンポンの姿を写している。ポンポンは石彫りを彫師のジャン＝ジョアシャン・シュペリ（Jean-Joachim Supéry）に依頼、写真ではまだ彫りの途中である。撮影された場所は、パリ郊外、マラコフのシュペリの工房である。

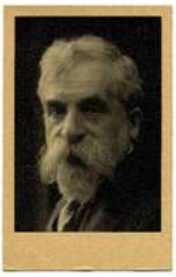
B_04 の戸口に立つポンポンの肖像写真は、ロベール・レイが伝えるような、ポンポンの姿をよく写しているだろう[45]。

B_05～07 は、7 番地のアトリエで写されたもので、06 の裏面の記載から、1932 年 5 月 24 日、画家のヴェラ・ド・ランシェフスキ（Véra de Landchevsky）と仲間がポンポンを囲んで撮られたと分かる（B_06 手前右の女性がランシェフスキと思われる）。

ポンポン晩年の制作中の貴重な写真も含まれている。B_08 は、1932 年 9 月、ノルマンディーのキュイ＝サン＝フィアクルで、元村長の孫のアンリ・デシャン（Henry Deschamps）をモデルに制作中の写真。キュイ＝サン＝フィアクルは、ポンポンが助手として手伝っていた彫刻家ルネ・ド・ポール・ド・サン＝マルソー（René de Paul de Saint-Marceaux）ゆかりの土地である。ポンポンは、アンリの祖母の依頼で肖像彫刻を制作した。当館には、その貴重な油土像が所蔵される。

B_09 は、ポンポンのポートレートとして最もよく知られる、自身が飼っていた鳩ニコラを抱く姿である。B_10 は、パリ郊外に住む医師フランソワ・ドゥバ （François Debat）家で飼われていたグレーハウント犬の作品を制作中の写真である。ドゥバは芸術愛好家で、雑誌『芸術と医学（Art et Medecine)』を編集・発行し、雑誌でポンポンの紹介も度々行っている。

PH_B_01


PH_B_02

PH_B_03

PH_B_05

PH_B_06

PH_B_07

PH_B_04

PH_B_08

PH_B_09

PH_B_10

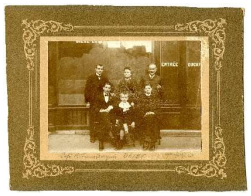
PH_B_11

[44] *L'Art vivant*, décembre 1925, p.20.

[45] Robert Rey, *op.cit.*, pp.8-10. 『フランソワ・ポンポンを知る』、p.73 に翻訳を掲載。

PH_C　人物・風景写真

その他の人物写真は、写っている人物が不明なものが多い。貴重なのは、C_01 のパリのフラン＝ブルジョワ通りのカフェの前で撮られた集合写真である。写真の最後列、向かって右端の男性が、ポンポンのサロン初出品作品である≪D 氏像≫（当館蔵）のモデルとなった人物である[46]。C_11 から 15 は、ポンポンが動物の観察に熱中した、キュイ＝サン＝フィアクルの農場の様子を伝える。C_09 も同地の写真と思われるが、詳細は不明。


PH_C_01

PH_C_09

PH_C_11

PH_C_12

PH_C_13

PH_C_14

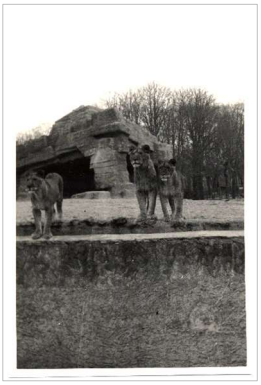
[46] 2021 年 10 月、リリアーヌ・コラ氏にご教示頂いた。

PH_D　動物写真

動物の写真は 24 点ある。これらは、ポンポンの制作において重要な役割を果たしたと考えられる。

撮影場所と年代がはっきりしているのは、D_01～04 の 1931 年のパリ国際植民地博覧会の動物園（動物展示）の写真である。ポンポンはこの博覧会場に出品しており、会場内の動物園に出かけて動物を観察したことは知られている。D_02 の裏面には、ポンポンの文字ではないが、ライオンの名前「パシャ／メネリク／ディッキー」（Pacha / Mènélik / Dickie）」が記されている。このうち 2 頭（写真左と中央）をモデルにポンポンは塑像を作っている[47]。D_01 に写る白い服の人物は、ドイツ人調教師のカール・ハービッグ（Karl Herbig）であることも裏面の記載から分かる。博覧会の動物展示を委託されたドイツの動物商カール・ハーゲン

PH_D_01


PH_D_02

PH_D_03

[47] 当館ではメネリクの石膏像を所蔵。国際植民地博覧会と動物園については、拙論「両大戦間期の動物彫刻とエキゾティシズム」、『エキゾティック×モダン　アール・デコと異境への眼差し』展図録、2018 年、pp.112-115. ポンポンは植民地博覧会のライオンの絵はがきなども持っていた。ポンポンは同博では装飾家パヴィリオンで大型石膏の≪カバ≫を、美術パヴィリオンで大型ブロンズの≪ペリカン≫出品 。

ベック（Carl Hagenbech）に連れられて来ていたのだろう。ハービッグは動物をリスペクトする近代的な調教師として名があがる人物である。

植民地博覧会の動物園にいた多種の動物の中で、ポンポンが試作をしたのはライオンだったことは、ポンポンのライオンという動物への思い入れの大きさを物語っている。実際これより前の 1926 年頃、パリ植物園内の動物園でライオンの葬儀の場にポンポンと居合わせ人が、ポンポンがライオンの死をいたく悲しんでいた様子を伝えている[48]。最晩年、ポンポンはライオンの作品を「3 年後には」、すなわち 80 歳になる頃に拡大したいと考えていたが、実現することなく 77 歳で亡くなった[49]。

ポンポンがパリで生涯、通った動物園は、植物園内の動物園だった。D_05〜09 の鹿や、11，12 のサイも、植物園で飼われていた動物である。

PH_D_05

PH_D_06

PH_D_07

PH_D_08

PH_D_09

PH_D_10

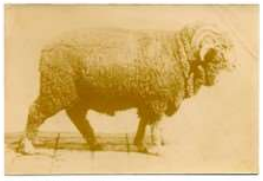
撮影場所などの詳細は不明だが、ポンポンがよく観察をした家畜動物の写真も含まれている。D_13 の豚の写真は、裏面にスタンプがあり、セーヌ＝オワーズ県の畜産者の育てたミドル・ホワイト・ヨークシャー種の豚であることが分かる。実際、ポンポンはヨークシャー種の豚をモデルに作品を作っている。

PH_D_11

PH_D_12

PH_D_13

PH_D_13（裏）


PH_D_14

PH_D_15

PH_D_16

[48] Gaston Poulain, « Créera-t-on à Saulieu un Musée Pompon ? », *Comœdia,* 8 novembre 1929.

[49] Raymond Henry, « Le sculpteur animalier François Pompon », *L'Ordre,* 19 janvier 1933.

ポンポンが制作上、写真についてどう考えていたのかを推し量ることができる言葉が残っている。「写真は、突然、動きが止められてできた、不安定で動かない断片であるのに対して、印象によって作られた作品は、もしそれが正しければ、私たちが実際に眼で見る、すなわち空間の中で見るような動きを表現することができる」[50]。写真より人間の目の優位性を語るものであるが、一方で、ポンポンは写真を制作の過程で、動物のプロポーションを測ったり、作品を拡大したりする際には利用したことが当館資料から想像される。例えば D_18 は、縦横斜めに線が引かれ、裏面には犬の頭部の輪郭をなぞる線が残されている。

D_17 は、チョコレート会社のジョルジュ・ムニエ（Georges Menier）のペットのボストン・テリヤ犬「トーイ」。ムニエは、トーイを連れてポンポンのアトリエを 1930 年 4 月から 10 月の間に 9 回も訪れ、さらにこうした写真を複数枚、ポンポンに渡していた（トーイの別角度の写真がオルセー美術館にも収蔵されている）。

ポンポンは、動物彫刻の制作では、基本的に観察時にデッサンはせず、直接、粘土や油土で塑造を行った。ノルマンディーでは農家の庭先で家禽類を多く観察したが、D_19 以降は、そうしたポンポンが見ていた風景を想像させる写真である。

PH_D_17

PH_D_18

PH_D_18（裏部分拡大）

PH_D_19

PH_D_20

PH_D_21

PH_D_22

PH_D_23

PH_D_24

[50] Paul Liger-Belair, « Idéal et Technique : La statuaire animalier François Pompon », *L'ESSOR,* 5e cahier, 1930, pp.3-4.

PH_E　フランソワ・ポンポンの作品写真（人物・鳥類）

ポンポンの作品を個別に写した写真は、E 人物・鳥類、F 四足動物として分類し、それぞれレゾネの番号順に並べた。写真は、ポンポン生前に撮影されたものもあるが、死後に撮影され 1994 年のレゾネなどに掲載されたものも多い。中には、現在は所蔵が不明となっている作品や個人蔵の作品の写真も含まれ、記録として重要である。またドゥムリスの家で撮影された写真や、死後鋳造作品の写真も含まれている。以下では、特に記録写真として重要と考えらえるものについてのみ触れておく。

人物彫刻では、E_002 の≪コゼット≫の写真が発表当時の作品状態を伝える。本作は、1888 年、ヴィクトル・ユゴーの小説『レ・ミゼラブル』に登場する少女の姿を等身大サイズの石膏で制作、サロンに初出品したもので（現、パリ、ヴィクトル・ユゴー記念館蔵）、写真では、3 等賞を受賞した賞のプレートが台座についているのが見える。

鳥類の彫刻写真は 62 点ある。この中で、初期作の E_020≪おとりの鴨≫（1884 年、テラコッタ）は、ポンポンがまだ他の彫刻家の下彫りをしていた時代に作られたもので、現在所在不明である。写真では、表面に凹凸があり、鳥の羽を懸命に形づくっている様子が見られる。水かきのある足下には、水しぶきだろうか、小さく丸めた粘土の塊や、植物のような装飾的要素も見られる一方で、首を曲げ、羽を広げた姿は、生命感を写そうとする意思を感じさせる。同じように鳥が羽をばたつかせる動きをとらえた最晩年の作品 E_016≪羽をばたつかせるコンゴウインコ≫と比較すると、ポンポンの彫刻への姿勢は、生涯、変わらなかったことが分かる。

E_038≪風見鶏≫は、裏面の記載の一部にポンポンの筆跡が見られる。1932 年、パリ郊外の町カシャン（Cachin）のサント・ジェルメーヌ教会のための風見鶏の注文を受けた時の覚書、または完成した作品発送時の記録ではないかと考えられる[51]。ポンポンの≪風見鶏≫は人気があり、多数作られた。なおコラ氏は、ポンポンが小さい時、ソーリューの教会の風見鶏が強風で落ちたのを拾って自分のものにしようとし、教会の司祭に戻すように諭されたという、かわいらしいエピソードを語っている[52]。

E_071 は、アール・デコの室内装飾家ピエール・モンタニャック(Pierre-Paul Montagnac)デザインの家具の上に≪バン≫を飾られた様子を写したものである。≪シロクマ≫で評価を受けた後、ポンポンのモダンな動物彫刻は、同時代の装飾家たちに取り入れられていくが、この写真もその状況を示す資料である。

PH_E_002

PH_E_020

PH_E_016

PH_E_038

PH_E_071

[51] 輸送業者のシュヌグロの名前、作品の発送日（予定？）なども書かれている

[52] 2000 年 3 月 14 日、来日作品調査時の記録。

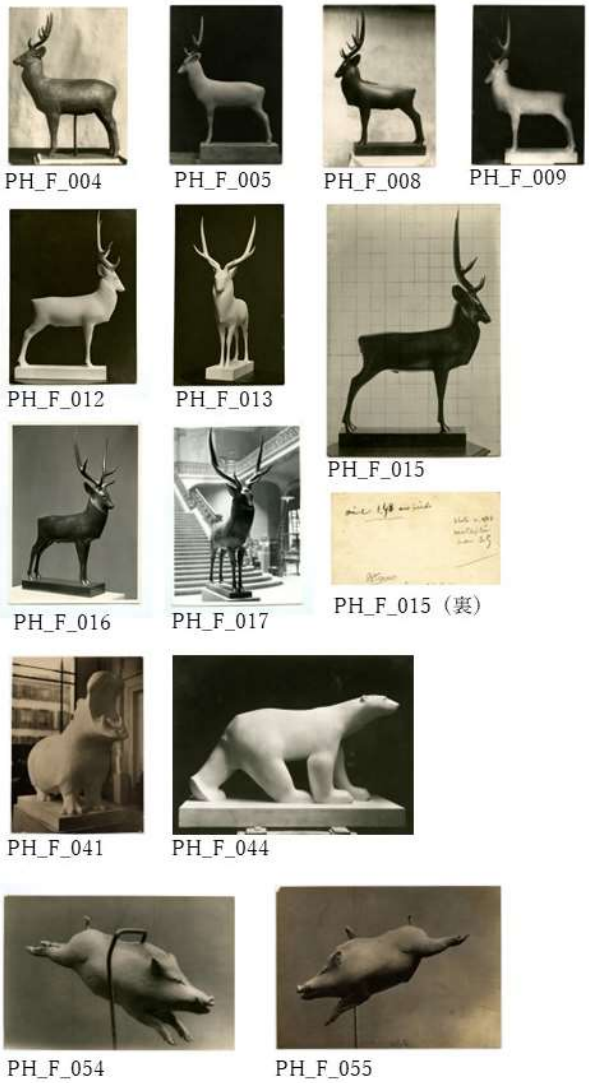
PH_F　フランソワ・ポンポンの作品写真（四足動物）

このカテゴリーでは、何種類かの動物ごとに写真が複数点あり、中には≪大鹿≫（F_004～017）のように、作品の発展を辿ることができるものもある。レゾネ（No.19）にも掲載されている F_004 の写真は、粘土像で支柱が付いている。次の段階となる F_005 の石膏像は、レゾネでは「ポンポンは頭部を調整するため首を切った」と記されている。首や胴体が細くなり、角は垂直に変化し、形態が整理されているのが如実である。F_008 の粘土像の写真には、耳、背、足（左前）に黒線で修正の書き込みがあり、よりシャープな形態を追求しているのが分かる。F_012・013 は、首まわりに平行線が走り、胴体の輪郭線が洗練される。この石膏像から作られたと考えられる、ブロンズの F_015 の写真には、鉛筆で 1cm の升目が引かれ、拡大のための目印とされた[53]。F_017 は、1929 年に完成した大型の≪大鹿≫がサロン・ドートンヌの会場のグラン・パレに飾られた様子である。

F_040, 041 の≪カバ≫の展示風景は、窓の形状から、国立自然史博物館の「ポンポン美術館」である[54]。

F_043～045 は、『芸術と装飾』誌 1922 年 12 月号に掲載された、大型の≪シロクマ≫の第 1 作目の写真である。この作品は、1928 年に国から石の複製制作の注文を受けた際に修正されたとされているため、制作当初の記録写真ととらえられる[55]。

F_054、055 は、≪猪≫の最初の石膏の形態の記録写真である。≪猪≫は、当初、現代装飾・産業美術国際博覧会（通称「アール・デコ博」）の野外のモニュメントの浮彫装飾として生まれたもので、その後、立体にしたのがこの写真にある作品である。棒で猪を吊り、浮彫で描いた飛ぶ猪の形を彫刻にするための試行錯誤が見られる。



[53] 写真裏面にはポンポンの筆跡で「足元まで 1.48／写真 0.084／25 倍にする」と書かれている。

[54]「ポンポン美術館」の写真は、『イリュストラシオン』1934 年 1 月 27 日号に見ることができる。

[55] 1 作目の大型石膏は、現在、国立自然史博物館蔵。パリ、人類博物館に展示。

F_057～076 は、牛の作品群の写真で、様々なタイプを比較して見ることができる（多くはカタログ・レゾネに掲載されている）。057 のリボンを付けた牛は、品評会で受賞した牛をモデルにしている。F_063～070 は、大型になった≪大雄牛≫の粘土、石膏、ブロンズへと、各素材の段階での形を見ることができる[56]。F_073～076 は、「フルール・ダムール」という名前の牝牛をモデルにした作品の粘土像と石膏像。1931 年にポンポンが旅行したサヴォワ地方の牛がモデルとなっている。F_074～076 は、ポンポン自身が斑模様を描いた唯一の石膏の写真。この作品は、2018 年にオークションに出たが、鋳造のための離型剤が施され、台座の献辞が消えた状態だった。そのため、この写真はオリジナルの状態を伝える記録資料となっている[57]。

PH_G　フランソワ・ポンポンの作品写真（複数作品）

複数点の作品を組み合わせて撮られた写真が 9 点ある。撮影年や掲載先などは不明。

PH_H　その他の写真

その他の作家の作品写真など。H_01 は、ポンポンがオーギュスト・ロダンから 1894 年にもらった≪接吻≫のエスキースの写真。ポンポンポンは、この作品をディジョン美術館に寄贈することを遺言に残し、現在も同館に所蔵される。

H_04 は、ポンポン死後の 1942 年、パリのシャルパンティエ画廊で行われた、ポンポンと、画家のアメデ・ド・ラ・パトリエール（Amédée de La Patellière）の 2 人展の記録写真とポスター、冊子が貼付されたアルバムである。

PH_F_057

PH_F_060

PH_F_063

PH_F_068

PH_F_065

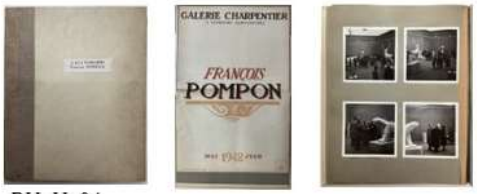
PH_F_074

PH_F_076

PH_F_074(部分)

PH_G_01

PH_H_01



PH_H_04

[56] F_068 は、1932 年にパリ市から注文を受け、サロン・ドートンヌに石膏が発表された後、ポンポン死後にブロンズ鋳造が完成した際の写真である。鋳造所はアンドロ（Andro）。なお、1949 年にソーリューの市内に設置された際の鋳造はオウィレール（Hohwiller）による。

[57] リリアーヌ・コラ氏のご教示よる。献辞は、「FLEUR D'AMOUR de la basse Rannée, a mon ami Chardelle F Pompon 1931」。*Catalogue de vente aux enchères publiques à l'Hôtel de Ventes de Monte-Carlo,* 2018, pp.52-53.

6　別館「彫刻家のアトリエ」とポンポン関連資料より―家具・オブジェ類

前項でポンポンのアトリエの写真を取り上げたことから、ここからは、当館別館の「彫刻家のアトリエ」と、そこに多くを展示している家具・オブジェ類について記していきたい。

6-a　別館「彫刻家のアトリエ」について

別館は、ポンポンのアトリエを再構成する「彫刻家のアトリエ」とワークショップ室のために建設されたものである。ポンポンのアトリエのあった建物は残っていないため、当館を設計した建築家の高橋靭一からの提案で、ポンポンの生まれ故郷フランス・ブルゴーニュ地方の農家をモデルとした建物となった。「彫刻家のアトリエ」は、アトリエ写真に基づき、「アトリエ一式」資料に加え、写真をもとに再現した物や、雰囲気を似せて作った物、購入したアンティーク品などがあわせて用いられた。保存上の観点から「アトリエ一式」資料の現物を使わず、複製を作った物もある（展示に使われた現物も多くは修復処置が施されている）[58]。

建設時、ポンポンのアトリエに関する情報は、写真数枚とポンポンの手帳に記された断片的なメモ、カタログ・レゾネ、2000 年 3 月に行われたコラ氏の来日調査時に得られた情報に限られていたと言えるだろう。今日では、ポンポン自身の手帳の記述が不明瞭であったことやカタログ・レゾネの写真が間違っていたこと[59]が少しずつ明らかとなり、それに伴い、当館の「彫刻家のアトリエ」に関しても解説の修正や展示のリニューアルを行ってきた（図 6）。もとより建物の形から「再現」ではないのだが、部屋のサイズや壁面構成も異なっている（元は細長い部屋であるが、「彫刻家のアトリエ」では、正面の壁は奥まったニッチ型となり、右手の壁は開いている）。とはいえ、歴史的な素材の価値を損ねないよう、注意深く作られた当館の「彫刻家のアトリエ」は、建材にもこだわった別館の建築と周囲の環境を含む全体として、ポンポンやアトリエの雰囲気に親しむことのできる場を形作っていると言えよう。

同時代の文献研究を進めていくと、当時の人々がポンポンの作品を語るときには必ずと言っていいくらいにアトリエと作家本人について触れており、その事実は看過できないのではないかと考えさせられる。ドゥムリスがポンポン死後、国立自然史博物館にアトリエ再構成を提言したのも、作家への愛着以上の、芸術家の本質理解の鍵を感じていたからではないだろうか。そうした歴史を引き継いだ当館の「彫刻家のアトリエ」は、ポンポンの人生と作品を知るための場として、また彫刻について理解を深めることのできる今日的な場として、これまでの活動（図 7〜10）[60]を引き継ぎ、今後も様々な形で活用されていくのが望ましいと考える。

---

[58]「彫刻家のアトリエ」の展示設計は、1999（平成 11）年 9 月に株式会社イトーキに委託され、2000 年 12 月に設計図が完成、工事が発注された。同年 12 月 1〜7 日、展示設計家らはパリの蚤の市や彫刻工具店、文具店、古書専門店などをまわり、20 世紀初頭の文具や手紙を調査・購入、万年筆や手紙類などを演出備品として役立てた。別館展示資料「彫刻家のアトリエができるまで」（2014 年 4 月、作成：神尾玲子）参照。

[59] カタログ・レゾネでは、1930 年にアトリエがリニューアルしたことが記されているが、それが 7 番地に新しいアトリエを設けたことであることとは明示されていない。ポンポン自身、手帳に新しいアトリエと古いアトリエのサイズを記した際に、番地を 3 番地とだけ書いていた（ポンポンの訪問者記録簿、当館蔵）。カタログ・レゾネのアトリエ写真の間違いについては、本稿 4 の A_09 に記した。

[60]「彫刻家のアトリエ」の展示関連イベントとして、2013 年より「ポンポン・ツアー」（年 4 回）を開始。2015 年、ポンポンの妻の肖像画（写真をもとに製作）の額破損に伴い、写真に忠実に額を再製作した工藤正明氏によるトークイベント（同年 11 月）（図 7）を行った。また、「彫刻家のアトリエ」建設時に展示用の石彫を制作した彫刻家の小野寺優元氏によるトークイベントも（2016 年 11 月）（図 8）も開催。

2023 年 1 月からは「さわって楽しむポンポン作品」コーナーを増設し、同年 4 月からは以下の 3 点を展示。≪アヒル≫1911-

（図6）リーフレット「別館「彫刻家のアトリエ」について

（図7）

（図8）

（図9）

（図10）

（図 7）　ポンポン・ツアー（2015 年 11 月）での工藤正明氏によるトーク
（図 8）　ポンポン・ツアー（2016 年 11 月）での小野寺優元氏氏によるトーク
（図 9）　別館「彫刻家のアトリエ」資料展示
（図 10）「さわって楽しむポンポン作品」コーナー（2023 年 4 月）

1927 年（1970 年代鋳造）、≪スカートの裾をたくしあげるコルセットの女性≫1894 年（鋳造年不明）、≪ボストン・テリヤ「トーイ」≫1930-1932 年（鋳造年不明）（図 10）。

6－b　家具・オブジェ類

「彫刻家のアトリエ」で使われている「アトリエ一式」資料は、「家具・オブジェ類」、「道具」、「石膏資料」の一部である。ここでは、「家具・オブジェ類」（MO）についてのみまとめる。

すでに触れた通り、「アトリエ一式」資料は、ポンポンのアトリエに由来するオリジナルの物と、ドゥムリスが国立自然史博物館の「ポンポン美術館」のために変更・追加した物が混ざっているが、その線引きは非常に難しい。リストでは、ポンポンのアトリエにあった可能性の高い資料に印を付けた。

ポンポンのアトリエに由来するオリジナルの物として確実と考えられるのは、MO_01～07、10、11 である。MO_01 の木製の階段模型は、木工家具職人であったポンポンの父アルバン・ポンポン(Alban Pompon)が若い時に、見習いを終えて職人としての認定を得るために作った成果品である。ポンポンにとっては父の形見のようなものだっただろう。MO_06 の万力つき仕事机も、父から譲り受けたものである。ポンポンは自ら、仕事の基礎を父から学んだと語っており、アトリエにも父の存在の大きさが現れていた。

MO_02～07、10、11 は、ローズマンの写真（PH_A_01~05）に映っている。04 のシードル用圧搾機のネジは、ポンポンの手帳（訪問者記録簿、当館蔵）のページ（1930 年 7 月以降）にデッサンと寸法が記されているが、何のためにどのように入手したのかなどは分かっていない。

MO_10～の椅子やスツールなどの家具や道具入れは、写真に映っているものもあれば（生地が張り替えられている）、年代的に大変古いと見えるものもあるが、詳細は不明である。MO_19

の木靴は、ポンポンが使っていたそのものではない可能性は高いが、ポンポンが実際に木靴を履いていたことは確かである。ポンポンの故郷ソーリューは、モルヴァン森林地帯の入口に位置し、木靴は古くから作られ、使われていた。

MO_16 の木箱は、ポンポンの身の回り品や文房具など細かな物がまとめて入っているものである。ふたの裏には、ポンポンの名前と住所が書かれており、ポンポン宛てに何かが送られた際の箱と思われる。中には、使い古された道具類や財布、眼鏡など、実際にポンポンが使用していた可能性の高いものと、ドゥムリスが「ポンポン美術館」の展示用に集めたり作ったりしたと思われるものが混ざっている。

MO_25 の九面体の大理石は、石彫職人の彫りの見本とされる。MO_26、27 の石や石膏のオブジェ類は詳細は不明だが、ポンポンのアトリエにはこうした用途不明の物も様々に置かれていたことを同時代の人が伝えている。

「彫刻家のアトリエ」には、彫塑台や万力などの道具、石膏資料も置かれているが、これらについては次回以降、他の道具とあわせて触れることとし、本稿はひとまずここで終わりにしたい。

(MO_01)

(MO_02)

(MO_03)

(MO_04)

(MO_05)

(MO_07)

(MO_10)

(MO_6) (MO_19)

(MO_16)

(MO_16)

(MO_25)

(MO_26)

(MO_27)

「彫刻家のアトリエ」内の家具・オブジェ類　配置図

＊本稿で扱った、家具・オブジェ類のみ番号を付して示した（MO は省略）。詳細は、p.38、39 のリスト参照。なお、家具・オブジェ類のうち、MO_15, 16, 28, 29 は展示されていない。

05
08
12
11

07
24
23
21
18
06
22
19
20

フランソワ・ポンポン関連資料リスト（写真資料、家具・オブジェ）

No.	資料名	撮影者	撮影年	寸法（イメージ）縦×横（cm）
PH	**写真資料**			
PH_A	**フランソワ・ポンポンのアトリエ関連写真**			
PH_A_01	フランソワ・ポンポンのアトリエ（パリ、カンパーニュ=プルミエール通り3番地）（1）	ローズマン	1933	22.9 × 16.8
PH_A_02	フランソワ・ポンポンのアトリエ（パリ、カンパーニュ=プルミエール通り3番地）（2）	ローズマン	1933	22.5 × 16.8
PH_A_03	フランソワ・ポンポンのアトリエ（パリ、カンパーニュ=プルミエール通り3番地）（3）	ローズマン	1933	17.5 × 23.1
PH_A_04	フランソワ・ポンポンのアトリエ（パリ、カンパーニュ=プルミエール通り3番地）（4）	ローズマン	1933	17.2 × 22.7
PH_A_05	フランソワ・ポンポンのアトリエ（パリ、カンパーニュ=プルミエール通り3番地）（5）	ローズマン	1933	16.6 × 23.1
PH_A_06	フランソワ・ポンポンのアトリエ（パリ、カンパーニュ=プルミエール通り7番地）（1）	ローズマン	1933 (?)	23.0 × 29.0
PH_A_07	フランソワ・ポンポンのアトリエ（パリ、カンパーニュ=プルミエール通り7番地）（2）	ローズマン	1933 (?)	22.5 × 28.6
PH_A_08	フランソワ・ポンポンのアトリエ（パリ、カンパーニュ=プルミエール通り7番地）（3）	ローズマン（？）	1933 (?)	18.0 × 23.8
PH_A_09	パリ、国立自然史博物館内に再構成されたフランソワ・ポンポンのアトリエ	ガブリエル	1934	16.5 × 23.5
PH_A_10	フランソワ・ポンポンの作品と道具			11.5 × 17.5
PH_A_11	スシー、ドゥムリス宅に飾られたフランソワ・ポンポンのアトリエ関連の品々（1）		1994	30.3 × 20.2
PH_A_12	スシー、ドゥムリス宅に飾られたフランソワ・ポンポンのアトリエ関連の品々（2）		1994	30.3 × 20.2
PH_A_13	スシー、ドゥムリス宅に飾られたフランソワ・ポンポンのアトリエ関連の品々（3）		1994	30.3 × 20.2
PH_A_14	スシー、ドゥムリス宅に飾られたフランソワ・ポンポンのアトリエ関連の品々（4）		1994	30.3 × 20.2
PH_A_15	スシー、ドゥムリス宅に飾られたフランソワ・ポンポンのアトリエ関連の品々（5）		1994	30.3 × 20.2
PH_A_16	スシー、ドゥムリス宅に飾られたフランソワ・ポンポンのアトリエ関連の品々（6）		1994	30.3 × 20.2
PH_A_17	スシー、ドゥムリス宅に飾られたフランソワ・ポンポンのアトリエ関連の品々（7）		1994	30.3 × 20.2
PH_A_18	スシー、ドゥムリス宅に飾られたフランソワ・ポンポンのアトリエ関連の品々（8）		1994	30.3 × 20.2
PH_A_19	スシー、ドゥムリス宅に飾られたフランソワ・ポンポンのアトリエ関連の品々（9）		1994	30.3 × 20.2

PH_A_20	スシー、ドゥムリス宅に飾られたフランソワ・ポンポンのアトリエ関連の品々（10）		1994	30.3 × 20.2
PH_A_21	スシー、自宅のジャンヌ・ドゥムリス夫人とフランソワ・ポンポンのアトリエ関連の品々			30.3 × 20.2
PH_A_22	フランソワ・ポンポンのアトリエ関連の品々とルネ・ドゥムリスの絵（1）			29.7 × 21.0
PH_A_23	フランソワ・ポンポンのアトリエ関連の品々とルネ・ドゥムリスの絵（2）			29.7 × 21.0
PH_A_24	ドゥムリス宅でガラスケースに飾られたフランソワ・ポンポンのアトリエ関連の品々（1）			12.7 × 18.8
PH_A_25	ドゥムリス宅でガラスケースに飾られたフランソワ・ポンポンのアトリエ関連の品々（2）			12.7 × 18.8

PH_B	**フランソワ・ポンポンの肖像写真**			
PH_B_01	教会の前に立つフランソワ・ポンポン			10.5 × 7.4
PH_B_02	フランソワ・ポンポンの肖像	ベルネス、マルート社	1925年以前	15.7 × 10.7
PH_B_03	シュペリが彫る≪シロクマ≫を前にしたフランソワ・ポンポン		1928-1929	16.2 × 11.1
PH_B_04	戸口に立つフランソワ・ポンポン		1930年頃	14.0 × 8.9
PH_B_05	パリ、カンパーニュ＝プルミエール通り7番地のアトリエのフランソワ・ポンポン		1932年5月24日	8.9 × 6.3
PH_B_06	フランソワ・ポンポンとパリ、カンパーニュ＝プルミエール通り7番地のアトリエの訪問者たち（1）		1932年5月24日	8.9 × 6.3
PH_B_07	フランソワ・ポンポンとパリ、カンパーニュ＝プルミエール通り7番地のアトリエの訪問者たち（2）		1932年5月24日	8.9 × 6.3
PH_B_08	《アンリ・デシャン》制作中のフランソワ・ポンポン		1932年9月	10.8 × 6.4
PH_B_09	フランソワ・ポンポンと鳩二コラ			22.0 × 16.1
PH_B_10	《立っているグレーハウント「スタプツラ」》を制作中のフランソワ・ポンポン		1933	17.1 × 11.9
PH_B_11	戸外のフランソワ・ポンポン			3.4 × 5.4

PH_C	**人物写真**			
PH_C_01	パリ、フラン・ブルジョワ通りのカフェの前の集合写真			20.3 × 26.2
PH_C_02	フランソワ・ポンポンの友人たち（1）		1925年9月2日	8.0 × 5.1

PH_C_03	フランソワ・ポンポンの友人たち（2）	1925年11月25日	8.2 × 8.3
PH_C_04	フランソワ・ポンポンの友人たち（3）		5.1 × 7.8
PH_C_05	馬の手綱を持つ女性		5.1 × 7.8
PH_C_06	二人の女性（1）		3.4 × 5.5
PH_C_07	二人の女性（2）		3.4 × 5.5
PH_C_08	二人の女性（3）		3.3 × 5.3
PH_C_09	キュイ＝サン＝フィアクルの農場の人々 (1)		4.4 × 6.8
PH_C_10	キュイ＝サン＝フィアクルの農場の人々 (2)		5.1 × 7.8
PH_C_11	キュイ＝サン＝フィアクルの農場風景 (1)		5.8 × 8.3
PH_C_12	キュイ＝サン＝フィアクルの農場風景 (2)		5.8 × 8.3
PH_C_13	キュイ＝サン＝フィアクルの農場風景 (3)		5.8 × 8.3
PH_C_14	キュイ＝サン＝フィアクルの農場風景 (4)		7.8 × 5.1
PH_C_15	アントワープ向けに制作中の≪シロクマ≫を前にしたルネ・ドゥムリス	1954	5.6 × 5.6
PH_C_16	スシーの自宅のジャンヌ・ドゥムリス	1970-1975	13.0 × 17.7

PH_D	**写真ー動物**		
PH_D_01	1931年国際植民地博覧会の動物園のライオン（1）	1931	12.0 × 16.9
PH_D_02	1931年国際植民地博覧会の動物園のライオン（2）	1931	13.9 × 9.0
PH_D_03	1931年国際植民地博覧会の動物園のライオン（3）	1931	9.0 × 13.8
PH_D_04	1931年国際植民地博覧会の動物園のライオン（4）	1931	9.0 × 13.9
PH_D_05	パリ植物園付属動物園の雌鹿と雄鹿（1）		3.4 × 5.0
PH_D_06	パリ植物園付属動物園の雌鹿と雄鹿（2）		3.4 × 5.0
PH_D_07	パリ植物園付属動物園の雄鹿（1）		3.4 × 5.0

PH_D_08	パリ植物園付属動物園の雄鹿（2）			3.4 × 5.0
PH_D_09	パリ植物園付属動物園の雄鹿（3）			3.4 × 5.0
PH_D_10	鹿と狩猟犬			12.0 × 16.5
PH_D_11	サイ			7.7 × 10.7
PH_D_12	サイ			15.0 × 19.6
PH_D_13	豚			5.1 × 8.0
PH_D_14	羊			8.2 × 12.4
PH_D_15	馬の親子			12.5 × 12.0
PH_D_16	牛の親子			14.2 × 10.0
PH_D_17	ボールで遊ぶボストン・テリヤ「トーイ」			7.8 × 10.6
PH_D_18	犬			11.0 × 16.7
PH_D_19	家禽			11.4 × 17.8
PH_D_20	鶏			11.5 × 18.2
PH_D_21	七面鳥			11.3 × 18.1
PH_D_22	白鳥と鴨			9.8 × 14.1
PH_D_23	鶏			11.9 × 17.2
PH_D_24	家禽			16.2 × 22.3

PH_E	**フランソワ・ポンポンの作品写真（人物・鳥類）**		*(　)は作品制作年	
PH_E_001	コゼット（石膏）	ベルネス、 マルート社		23.0 × 16.9
PH_E_002	コゼット（等身大石膏）		(1888)	25.3 × 17.0
PH_E_003	コゼット（ブロンズ）			17.7 × 12.5
PH_E_004	アンリ・デシャン（ブロンズ）		(1932)	22.2 × 16.5

PH_E_005	アンリ・デシャン（ブロンズ）		(1932)	22.4 × 16.2
PH_E_006	子どもの顔（テラコッタ）		(1891)	23.8 × 17.8
PH_E_007	スカートの裾をたくし上げるコルセットの女性（ブロンズ）			25.5 × 20.3
PH_E_008	キュイ＝サン＝フィアクルの戦没者記念碑（石膏模型）		1989頃 (1919-1921)	28.9 × 20.0
PH_E_009	ベルト・ポンポン（石膏）			21.5 × 17.9
PH_E_010	ベルト・ポンポン（石膏）			29.1 × 20.0
PH_E_011	クロディーヌ・ポンポン			24.0 × 17.9
PH_E_012	クロディーヌ・ポンポン（ブロンズ）	ベルネス、 マルート社		23.3 × 16.8
PH_E_013	クロディーヌ・ポンポン（ブロンズ）	ベルネス、 マルート社		17.5 × 11.0
PH_E_014	男性胸像			13.0 × 10.3
PH_E_015	コンゴウインコ（縞入り瑪瑙）	ローズマン	(1930)	22.7 × 16.5
PH_E_016	羽根をばたつかせる金剛インコ	ローズマン	(1933)	21.5 × 14.7
PH_E_017	アヒル（石膏、浅浮彫）		(1907)	24.1 × 17.8
PH_E_018	アヒル（石膏、浅浮彫）	ベルネス、 マルート社	(1907)	17.5 × 22.8
PH_E_019	アヒル（石膏）			15.0 × 9.8
PH_E_020	おとりの鴨（テラコッタ）		1884	23.4 × 17.8
PH_E_021	水上で胸を張る鴨（ブロンズ）			20.4 × 25.3
PH_E_022	フクロウ（ブロンズ）			24.3 × 18.0
PH_E_023	眼の突き出たフクロウ（石膏）			28.9 × 19.9
PH_E_024	フクロウ（ブロンズ）			25.3 × 20.5
PH_E_025	ワシミミズク（石膏）	ローズマン		23.3 × 16.5
PH_E_026	ワシミミズク（ブロンズ）			23.9 × 17.6
PH_E_027	コンドル（ブロンズ）	ベルネス、 マルート社		23.5 × 17.5

PH_E_028	コンドル（ブロンズ）	ベルネス、 マルート社		23.3 × 17.4
PH_E_029	コンドル（ブロンズ）			27.6 × 23.5
PH_E_030	コンドル（ブロンズ）			27.7 × 23.5
PH_E_031	ベルト・ポンポンの墓標のコンドル			10.4 × 7.6
PH_E_032	雄鶏（ブロンズ）		(1927)	22.2 × 16.7
PH_E_033	闘う雄鶏（石膏）	ベルネス、 マルート社	(1923-1924)	23.0 × 16.9
PH_E_034	闘う雄鶏（石膏）	ローズマン	(1923-1924)	23.8 × 16.5
PH_E_035	闘う雄鶏（石膏）	ローズマン	(1923-1924)	23.7 × 17.0
PH_E_036	眠る雄鶏（石膏）	マルク・ヴォー		10.7 × 16.6
PH_E_037	眠る雄鶏（石膏）	マルク・ヴォー		10.5 × 16.0
PH_E_038	風見鶏	シュヴォジョン	(1908-1932)	17.0 × 22.5
PH_E_039	風見鶏（頭部）		(1924)	10.7 × 18.0
PH_E_040	ホウカンチョウ（ブロンズ）		(1924-1929)	11.9 × 16.3
PH_E_041	ホウカンチョウ（ブロンズ）	ベルネス、 マルート社	(1924-1929)	17.5 × 22.9
PH_E_042	カラス（ブロンズ）	ローズマン	(1928-1929)	22.0 × 17.0
PH_E_043	カラス（石膏）		(1928-1929)	12.2 × 16.3
PH_E_044	七面鳥（ブロンズ）		(1925)	23.5 × 16.6
PH_E_045	休息するカンムリヅル（ブロンズ）	ローズマン	(1925)	23.0 × 16.0
PH_E_046	休息するカンムリヅル（ブロンズ）		(1925)	22.6 × 15.7
PH_E_047	ハゲコウ（石膏）			16.9 × 12.0
PH_E_048	ガチョウ（ブロンズ）			23.9 × 17.8
PH_E_049	ガチョウ（ブロンズ）			23.9 × 17.7
PH_E_050	ガチョウ（ブロンズ）			23.8 × 17.7

PH_E_051	クジャク（ブロンズ）			20.2 × 25.6
PH_E_052	ペリカン（ブロンズ）	ガブリエル	(1924)	23.5 × 17.7
PH_E_053	ペリカン（ブロンズ）	ローズマン		22.5 × 16.9
PH_E_054	ペリカン（石膏）	ベルネス、 マルート社		16.5 × 11.1
PH_E_055	ペリカン（石膏）	ベルネス、 マルート社		16.5 × 11.1
PH_E_056	ペリカン（ブロンズ）	ベルネス、 マルート社		22.3 × 17.0
PH_E_057	ペリカン（ブロンズ）			16,5 × 11.5
PH_E_058	紅ヨーロッパやまうずら（石膏）			10.4 × 8.0
PH_E_059	インコ（大理石）	ベルネス、 マルート社	(1933)	23.4 × 15.3
PH_E_060	インコ（大理石）		(1933)	17.3 × 10.5
PH_E_061	胸をふくらませた鳩	ヴィッツァノーヴァ	(1927)	17.5 × 12.7
PH_E_062	鳩ニコラ	ベルネス、 マルート社		17.4 × 22.9
PH_E_063	鳩ニコラ	ベルネス、 マルート社		17.4 × 23.0
PH_E_064	鳩ニコラ			12.0 × 16.8
PH_E_065	小さな鳩（石膏）	ベルネス、 マルート社	(1926－1927)	21.6 × 17.5
PH_E_066	小さな鳩（石膏）			12.0 × 16.9
PH_E_067	切断された巣の中の鳩（石膏）			16.0 × 20.0
PH_E_068	雉鳩（ブロンズ）			22.3 × 16.5
PH_E_069	雉鳩（ブロンズ）			22.3 × 16.6
PH_E_070	バン（石膏）	ベルネス、 マルート社		17.0 × 22.9
PH_E_071	ピエール＝ポール・モンタニャックの戸棚の上に置かれたフランソワ・ポンポンの≪バン≫		1923	16.8 × 23.0
PH_E_072	バン（ブロンズ）			25.2 × 20.3
PH_E_073	バン（石膏）			14,3 × 9.3

PH_E_074	バン（石膏）			9.9 × 15.1
PH_E_075	雉（ブロンズ）			20.3 × 25.3
PH_E_076	雉（ブロンズ）	ミシェル・ウィルト		12.7 × 18.0

PH_F	**フランソワ・ポンポンの作品写真（四足動物）**			
PH_F_001	バイソン（ブロンズ）		(1907)	11.0 × 15.5
PH_F_002	バイソン（ブロンズ）		(1928頃)	16.6 × 22.5
PH_F_003	バイソン（ブロンズ）		(1928頃)	16.6 × 22.4
PH_F_004	大鹿（粘土）	ベルネス、マルート社	(1928)	22.5 × 17.0
PH_F_005	大鹿（石膏）		(1929)	23.0 × 16.2
PH_F_006	大鹿（石膏）		(1929)	22.8 × 15.4
PH_F_007	大鹿（石膏）		(1929)	22.8 × 15.4
PH_F_008	大鹿（粘土）		(1929)	15.2 × 10.4
PH_F_009	大鹿（石膏）	ベルネス、マルート社	(1929)	16.9 × 11.7
PH_F_010	大鹿（石膏）	ベルネス、マルート社	(1929)	16.8 × 11.9
PH_F_011	大鹿（石膏）	ベルネス、マルート社	(1929)	16.8 × 11.6
PH_F_012	大鹿（石膏）	ローズマン	(1929)	23.4 × 17.0
PH_F_013	大鹿（石膏）	ローズマン	(1929)	16.7 × 10.2
PH_F_014	大鹿（ブロンズ）	ローズマン	(1929)	17.3 × 12.0
PH_F_015	大鹿（ブロンズ）	ローズマン	(1929)	17.3 × 11.9
PH_F_016	大鹿（ブロンズ）		(1929)	22.1 × 15.8
PH_F_017	サロン・ドートンヌのグラン・パレ会場に展示された≪大鹿≫	マルク・ヴォー	(1929)	22.6 × 16.3
PH_F_018	仔馬（石膏）		(1930)	6.0 × 8.0

PH_F_019	バセットハウンド「トック」（石膏）			17.7 × 12.6
PH_F_020	立っているグレーハウンド「スタプツラ」（石膏）	ローズマン	(1932)	11.5 × 16.7
PH_F_021	ボストン・テリア「トーイ」（石膏）	マルク・ヴォー	(1930-1932)	12.2 × 16.1
PH_F_022	ヨークシャー種の子豚（石膏）			13.0 × 17.8
PH_F_023	ヨークシャー種の子豚（ブロンズ）			16.6 × 22.3
PH_F_024	ヨークシャー種の子豚（ブロンズ）			11.0 × 16.5
PH_F_025	子豚（ブロンズ）			16.5 × 22.3
PH_F_026	子豚（ブロンズ）			16.5 × 22.3
PH_F_027	子豚（ブロンズ）			16.5 × 22.3
PH_F_028	子豚（ブロンズ）			15.6 × 23.6
PH_F_029	牝豚と子豚たち(石)			16.9 × 22.9
PH_F_030	牝豚と子豚たち(石)	ベルネス、 マルート社		16.4 × 23.4
PH_F_031	牝豚（ブロンズ）			12.6 × 17.7
PH_F_032	ラクダ（石膏）			16.5 × 22.2
PH_F_033	ラクダ（石膏）			10.8 × 16.4
PH_F_034	ゾウ（石膏）	マルク・ヴォー	(1933)	11.1 × 16.6
PH_F_035	ゾウ（ブロンズ）	リュドミーヌ		23.6 × 29.8
PH_F_036	ゾウ（ブロンズ）	リュドミーヌ		23.7 × 29.7
PH_F_037	カバ（石膏）展示風景（部分）	マルク・ヴォー		16.7 × 22.8
PH_F_038	カバ（石膏）展示風景（部分）	マルク・ヴォー		16.7 × 22.8
PH_F_039	カバ（石膏）展示風景（部分）	マルク・ヴォー		16.7 × 22.8
PH_F_040	パリ、国立自然史博物館のカバ（石膏）展示風景	ローズマン	1934以降 (1931)	22.9 × 16.6
PH_F_041	パリ、国立自然史博物館のカバ（石膏）展示風景	ガブリエル	1934以降 (1931)	23.7 × 17.6

PH_F_042	オランウータン（黒大理石）	ローズマン	(1930)	14.7 × 15.9
PH_F_043	シロクマ（大型石膏）	ベルネス、マルート社	(1922)	16.2 × 22.2
PH_F_044	シロクマ（大型石膏）	ベルネス、マルート社	(1922)	15.8 × 22.9
PH_F_045	シロクマ（大型石膏）	ベルネス、マルート社	(1922)	16.8 × 21.8
PH_F_046	シロクマ（顔部部分）			17.6 × 12.5
PH_F_047	斑点のある豹（頭部）	ベルネス、マルート社	(1921)	22.8 × 16.8
PH_F_048	斑点のある豹（石膏）	ベルネス、マルート社	(1924-1930)	10.8 × 16.6
PH_F_049	斑点のある豹（石膏）	ベルネス、マルート社	(1924-1930)	10.8 × 16.6
PH_F_050	黒豹（ブロンズ）		(1925)	16.5 × 22.3
PH_F_051	黒豹（ブロンズ）		(1925)	16.5 × 22.3
PH_F_052	サイ（石膏）	マルク・ヴォー	(1928)	11.5 × 16.8
PH_F_053	サイ（ブロンズ）			17.8 × 24.0
PH_F_054	針金に吊られた猪（石膏）	ベルネス、マルート社		15.4 × 22.9
PH_F_055	針金に吊られた猪（石膏）	ベルネス、マルート社		11.2 × 15.5
PH_F_056	猪（石膏）			9.8 × 15.0
PH_F_057	リボンをつけた牛	ローズマン	(1930)	12.1 × 16.5
PH_F_058	リボンをつけた牛		(1930)	17.0 × 23.7
PH_F_059	仔牛のデッサン（フランソワ・ポンポンのデッサン帳からの複製写真）	ローズマン		11.5 × 16.9
PH_F_060	仔牛（石膏）			11.7 × 17.1
PH_F_061	雄牛（ブロンズ）	ジョルジュ・アリー	(1922)	14.6 × 20.5
PH_F_062	雄牛（ブロンズ）	ジョルジュ・アリー	(1922)	14.5 × 20.5
PH_F_063	大雄牛（粘土、支柱つき）		(1931)	16.5 × 22.5
PH_F_064	大雄牛（粘土）	ローズマン	(1932)	16.2 × 22.7

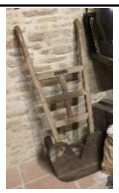
PH_F_065	大雄牛（石膏）	ローズマン		12.6 × 17.3
PH_F_066	大雄牛（石膏）	ローズマン		12.6 × 17.5
PH_F_067	大雄牛（石膏）	ローズマン		12.5 × 17.5
PH_F_068	アンドロ鋳造所の≪大雄牛≫	ローズマン	1933	21.4 × 28.3
PH_F_069	大雄牛（ブロンズ）	ローズマン	(1933)	19.6 × 26.5
PH_F_070	ソーリューのポンポン広場の≪大雄牛≫		(1949)	9.5 × 14.3
PH_F_071	大雄牛（ブロンズ）	ベルネス、 マルート社		16.5 × 11.0
PH_F_072	大雄牛（ブロンズ）			8.9 × 12.7
PH_F_073	雌牛「フルール・ダムール」（粘土）	ベルネス、 マルート社	(1927)	17.4 × 22.8
PH_F_074	雌牛「フルール・ダムール」（石膏、彩色）	マルク・ヴォー	(1927)	17.1 × 22.4
PH_F_075	雌牛「フルール・ダムール」（石膏、彩色）	マルク・ヴォー	(1927)	16.2 × 22.5
PH_F_076	雌牛「フルール・ダムール」（石膏、彩色）	マルク・ヴォー	(1927)	17.2 × 22.7
PH_F_077	遊ぶ雌トラ（石膏）		(1927-1926)	11.0 × 16.8
PH_F_078	モグラ(?)	ミシェル・ウィルト		12.7 × 17.9

PH_G	**フランソワ・ポンポンの作品写真（複数作品）**	
PH_G_001	≪ハイエナ≫と≪カバ≫	18.0 × 24.2
PH_G_002	≪インドの雌鹿≫と≪黒豹（頭部）≫	18.0 × 24.2
PH_G_003	≪闘う雄鶏≫と≪戦没者記念碑（雄鶏部分）≫	16.5 × 22.1
PH_G_004	≪カラス≫と≪雌鶏≫	16.5 × 22.2
PH_G_005	≪ハゲコウ≫≪白鳥≫≪カンムリヅル≫	16.5 × 22.2
PH_G_006	≪キンケイ≫と≪子豚≫	15.2 × 11.2
PH_G_007	≪リュシアン・モジェ≫、≪ラクダ≫、≪円筒形の巣の中の雌鳩≫、 ≪餌をついばむ雄鶏≫	15.1 × 23.0

PH_G_008	≪カタツムリ≫、≪？≫、≪尾を上げて眠る雄鶏≫、≪狼の頭≫、≪生まれたての雛、割れた卵≫			22.0 × 16.4
PH_G_009	≪牝豚≫、≪子豚≫	クロード・アレクサンドル		12.7 × 17.9

PH_H	**その他の写真**		
PH_H_01	オーギュスト・ロダン≪接吻≫エスキース		22.4 × 16.5
PH_H_02	ルネ・ドゥムリス≪鳩を抱くポンポン≫（油彩画）の写真	(1923)	27.8 × 21.8
PH_H_03	フランソワ・ポンポンの肖像画（作者不明）の写真		8.0 × 5.5
PH_H_04	A・ド・ラ・パトリエール／フランソワ・ポンポン　展覧会アルバム	1942	39.5 × 32.5

	No.	資料名	来歴	材質・技法	寸法　高さ×幅×奥行（cm）
	MO	**家具・オブジェ**	来歴 ＊ポンポンのアトリエ由来		
	MO_01	アルバン・ポンポンによる木の螺旋階段模型	＊	木	24.2　×　15.3　×　15.3
	MO_02	地図（バビネ平面球形図）	＊	紙	97.0　×　128..0
	MO_03	鳩時計	＊	木、他	17.5　×　12.4　×　11.5
	MO_04	シードル用圧搾機のねじ	＊	木	228.0　×　19.5　×　21.0
	MO_05	ピエール・ボントンによるフランソワ1世の墓石レリーフ「マリニャーノの戦い」の複製	＊	石膏	42.0　×　167.0　×　5.0
	MO_06	木工職人の仕事台	＊	木	80.5　×　42.0　×　141.0
	MO_07	飾り棚	＊	木	128.0　×　168.0×　×　20.0
	MO_08	レンジ		鉄板	78.5　×　54.0　×　83.0
	MO_09	椅子		木	123.5　×　56.0　×　54.0

	MO_10	椅子	＊	木、籐	84.5	×	40.5	×	42.0
	MO_11	肘掛け椅子	＊	木、布	92.0	×	58.0	×	62.0
	MO_12	スツール	?	木、麻紐	77.5	×	33.5	×	33.5
	MO_13	折り畳み式荷物置き	?	竹	70.0	×	48.0	×	58.5
	MO_14	木箱	?	木、金属	24.5	×	44.5	×	16.5
	MO_15	道具箱	>	木、金属	20.5	×	29.1	×	5.0
	MO_16	ポンポンの道具箱（身の回り品ほか）	＊	木	56.5	×	24.0	×	27.6
	MO_17	整理棚	?	木	9.2	×	33.0	×	19.0
	MO_18	手押し車	?	木、鉄	105.5	×	47.0	×	46.0
	MO_19	木靴		木	11.0	×	30.9	×	11.7

	MO_20	手桶			50.0	×	25.0	×	26.0
	MO_21	テラコッタの水差し		テラコッタ	28.9	×	10.1	×	12.8
	MO_22	灰皿	＊	陶器	13.5	×	19.7	×	13.3
	MO_23	灰皿		陶器	11.4	×	20.6	×	15.1
	MO_24	石膏の皿		石膏			φ21.2	×	2.8
	MO_25	職人による大理石彫り見本	＊	大理石	9.8	×	φ12.3		
	MO_26	化石	＊	石	9.0	×	φ10.5		
	MO_27	歯型の石膏	＊	石膏	12.4	×	20.0	×	7.0
	MO_28	山羊の角	＊	角	2.6	×	14.2	×	6.3
	MO_29	山羊の角	＊	角	2.1	×	14.8	×	6.8

	MO_16の中身							
	MO_16_01	ビュラン	木、金属	3.3	×	12.0	×	3.3
	MO_16_02	ビュラン	木、金属	3.0	×	11.5	×	3.0
	MO_16_03	鉄筆	木、金属	1.0	×	17.5		
	MO_16_04	鉄筆	木、金属	0.7	×	18.5		
	MO_16_05	木片（10本）	木	5.0 ～8.2				
	MO_16_06	金属部品	金属	10.5	×	2.2		
	MO_16_07	クリップ（3点）	金属	各 1.2	×	6.2	×	0.8
	MO_16_08	金属部品	金属	2.5	×	9.0	×	4.0
	MO_16_09	道具 (?)	金属	2.0	×	9.8	×	4.0
	MO_16_10	ボルト、ナット、ワッシャー	金属	（ボルト・ナット） 4.4～9.2×0.7～1.0 （ワッシャー） ϕ 1.2, 1.5				

	MO_16_11	針金	金属	3.5	×	5.5		
	MO_16_12	鉛筆	木	0.6	×	17.5		
	MO_16_13	色鉛筆など（4本）	木	5.7 ～10.8				
	MO_16_14	サン・ダンジェ社水彩絵具（3点）	水彩絵具	0.4 ～0.5	×	2.5	×	1.0
	MO_16_15	鉛の塊	鉛	1.0	×	8.0	×	7.8
	MO_16_16	虫の型取り	鉛	1.2	×	3.5	×	3.5
	MO_16_17	虫の型取り	鉛	1.5	×	5.8	×	3.8
	MO_16_18	財布（大）	布、金属	20.5	×	13.5		
	MO_16_19	財布（小）	布、金属	6.5	×	10.5		
	MO_16_20	眼鏡入れ	革	5.7	×	10.0		

	MO_16_21	眼鏡	ガラス、金属	5.5	×	9.5		
	MO_16_22	小さな木靴	木	5.5	×	13.0	×	5.5
	MO_16_23	カフスボタン	金属	2.0	×	2.5	×	2.0
	MO_16_24	ネームプレート	金属	1.2	×	7.2		
	MO_16_25	甘草飴のケース	紙	2.0	×	7.3		
	MO_16_26	アドリアン・モラン社製シール	紙	1.8	×	ϕ 6.0		
	MO_16_27	円形の箱（空）	紙	2.0	×	ϕ 6.0		
	MO_16_28	N.アントワーヌ社製シール	紙	2.0	×	ϕ 6.5		
	MO_16_29	箱	紙	1.4	×	11.2	×	2.2
	MO_16_30	フラン・ジェルミナル 10サンチーム硬貨	銅			ϕ 3.0		

	MO_16_31	メタル	金属				ϕ 2.2
	MO_16_32	金属製輪の入ったタバコの箱	紙、金属	2.1	×	8.5	× 4.5
	MO_16_33	動物の爪（？）	爪 (?)	2.0	×	5.5	
	MO_16_34	シガレットホルダー	ベークライト (?)	9.6	×	1.0	

Archival Materials Regarding François Pompon in the Collection of Gunma Museum of Art, Tatebayashi —[1] Photographs, Furniture, and Objects (Summary)

MATSUSHITA Kazumi

This paper is the first in a series of studies to be continued hereafter in several parts on classifying and cataloguing the archival materials on François Pompon, a twentieth-century French sculptor of animals, which are at the core of the collection of Gunma Museum of Art, Tatebayashi.[1]

To begin with, let us look back on the establishment of this museum and its history of collecting works by Pompon. Plans to establish a museum in Tatebayashi, a city in the east of Gunma Prefecture, as the second prefectural art museum following the Museum of Modern Art, Gunma, which opened in Takasaki in 1974, began in 1993. Works began to be purchased according to the basic policy presented at the "Committee to Consider Basic Plans for a Prefectural Art Museum in the Tōmō Area" (chaired by Nakayama Kimio) in January 1995. The initial theme was "People, Animals, and Flowers," which was revised to "Nature and Mankind" in 2000. Acquisition proceeded, and works by Pompon were purchased on several occasions between March 1995 and May 1998.

The archival materials regarding Pompon were acquired as part of these acquisitions in November 1995. They originally belonged to the surviving family of René Demeurisse, who was the executor of Pompon's will. After Pompon died in 1933, following a proposal put forth by Demeurisse, Pompon's studio was reconstructed together with a display of his works at the Muséum national d'Histoire naturelle in Paris, which acquired the works. This gallery was named "Musée Pompon."[2] However, due to World War II, Musée Pompon was closed in September 1939. In 1948 many works were entrusted on long-term loan by the Muséum national d'Histoire naturelle to the Musée des Beaux-Arts de Dijon etc. It seems that the archival materials from Pompon's studio were, at some point, returned to Demeurisse. Materials deriving from Pompon's studio are currently held at the Musée d'Orsay and the Muséum national d'Histoire naturelle too.

As the archival materials we acquired included many pieces of furniture and objects related to Pompon's studio, in view of the opening of our museum in 2001, based on research and advice provided by Pompon expert Liliane Colas, the project office planned to utilize them by restructuring Pompon's studio as an annex, where visitors could enjoy sculptures. As it was impossible to rebuild the original studio, following a proposal made by the architect Takahashi Teiichi, the annex was modeled on a simple farmhouse in Burgundy, Pompon's hometown. The space in which Pompon's studio was reconstructed was named "The Sculptor's Studio" and is open at all times. Facing the studio, within the same annex, there is also a Workshop Room, where a variety of educational programs are held to this day.

The content of the archival materials related to Pompon is wide-ranging and includes Pompon's tools, plaster materials, molds, photographs, notebooks, letters, business cards, picture postcards, newspaper and magazine clippings, posters, and documents. Number-wise, there are over one thousand items. So far, while surveying these materials, we have displayed selected items in showcases according to different themes rearranged four times a year. At the François Pompon Retrospective held in 2021–22, we also set up a comparative display with his works. Nevertheless, as we have not yet been able to make the totality of the materials public, in this bulletin, we plan to publish an inventory of the materials over the next few issues. As the first part of this series, this paper focuses on the photographs, furniture, and objects, which comprise the starting point of "The Sculptor's Studio" at our museum.

On the Photographic Archives

The photographic archives consist of 243 items, which show many works by François Pompon included in the catalogue raisonné published in 1994.[3] Among them, the eight photographs showing Pompon's studio in Montparnasse (PH_A_01–08, see pp. 11–14) are very important. The first five show his studio at 3 Rue Campagne-Première taken by Roseman upon instruction

from Demeurisse in May 1933, immediately after Pompon's death. Pompon rented an apartment at number 7 of the same street from 1930, where he placed large works and received visitors. There are three pictures of number 7. Also included in our collection are photographs of Pompon together with friends taken in the studio at number 7 (PH_B_05–07, see p. 15).

Among the pictures of the studios, there is also a photograph of the "Musée Pompon" at the Muséum national d'Histoire naturelle (PH_A_09). According to the January 27, 1934 issue of *Illustration* (fig. 4, see p. 8), through Demeurisse's enthusiasm, based on detailed measurements, the studio at "Musée Pompon" was "reconstructed entirely and identically to" the original. Indeed, comparing the photographs, they are very similar. The only points noticeable are the slight differences in the arrangement of the works on the shelves or the ornaments around the desk.

Regarding other studio-related photographs, there are also photographs of the studio archives kept at Demeurisse's house in Soucy, in the north of France (PH_A_11–25). Among them, there is a photograph showing a mummified cat hung by Pompon as an ornament on the wall, which several people who visited Pompon's studio during his lifetime wrote about (see p. 14).

Next are some portraits of Pompon (PH_B, see p. 15). There are eleven, many of which appear to have been taken when Pompon was seventy years old or later. Among the photographs of people other than Pompon and landscapes (PH_C), a picture including the model for an early bust by Pompon is noteworthy (PH_C_01, see p. 16).[4] Notable among the landscapes is a view of Cuy-Saint-Fiacre in Normandy in those days, where Pompon was taken to by the sculptor René de Saint-Marceaux and stayed.

The photographic archives also include twenty-four pictures of animals, which Pompon appears to have collected (PH_D, see pp. 16–18). There are photographs of lions at the Paris Colonial Exposition of 1931 (D_01–04), deer photographed at the zoo in Jardin des Plantes (D_05–09), livestock such as pigs, goats, horses, and cows (D_11–16), a dog which served as a model for Pompon's work (D_17), and domestic fowls (D_19–24). One picture of a dog (D_18) shows us that Pompon utilized photographs in producing his works. The recto of this photograph is marked with vertical, horizontal, and diagonal lines, and the verso shows evidence of the contours of the dog's head having been traced in pencil. Pompon said, "Photography is an immobile and unstable fraction of movement brusquely congealed," and maintained that the impression seen with the human eye holds priority in producing works.[5] However, as this photograph indicates, it is notable that, utilizing the characteristic of photography, he did use photographs to grasp the proportions or forms.

The largest category among the photographic archives are pictures of the sculptural works by Pompon, which amount to more than 150 photographs (PH_E, F). A picture of an early work would be *Cosette* (PH_E_001), a life-size plaster figure of a girl. There are also photographs of *Water Hen* (PH_E_071) placed in an Art Deco interior by Pierre-Paul Montagnac, and *Polar Bear* (PH_F_043–045), when it was first presented in 1922, etc.

The nine photographs of *Large Deer* (see p. 20) illustrate the development from the clay figure to the large bronze. The picture of what seems to be the final stage of the bronze figure taken from the side (PH_F_015) is marked with 1 cm wide grid lines on the recto and enlargement instructions in Pompon's handwriting on the verso. This is another example of Pompon's use of photographs to produce his sculptures, and it also shows that he was extremely precise about mathematics in his work. The large bronze, *Large Deer*, completed after this was presented at the Salon d'Automne in 1929 (PH_F_017).

The old photographs also serve as precious records of works that have now transformed. The picture of *Vache Fleur d'Amour* (PH_F_074, 076, see p. 21) with black patches on white plaster shows the dedication

inscribed on the pedestal.[6] When this statue appeared at an auction in 2018, the mold release agent applied when it was cast had discolored.

The Furniture and Objects and "The Sculptor's Studio" at Our Museum

There are sixty-three items catalogued as furniture and objects (MO_01–29, see pp. 59–65). Some are considered to be original items from Pompon's studio, and others were altered or added by Demeurisse for the "Musée Pompon," but it is difficult to distinguish them. In the list, items said to have originated in the studio or considered highly possible to have derived from the studio are marked. There are, for example, a model for a wooden spiral staircase by François's father, Alban Pompon (MO_01);[7] the worktable with a jack, which François inherited from his father (MO_06); an old map (MO_02), the screw of a cider press (MO_04), a plaster relief (MO_05), and a display shelf on which works were lined up (MO_07), all of which can also be identified in the pictures taken by Roseman. There are many different kinds of objects and a sundry box, many of which details remain unknown.

"The Sculptor's Studio" at our museum was installed using these furniture and objects and referring to the above-mentioned photographs of the studio (see pp.25, 26). The layout of the room is slightly different from the original and is not an exact reproduction of Pompon's studio. However, as far as the exhibits are concerned, in addition to archival materials deriving from the studio, the display has been carefully structured by reproducing items based on photographs or by supplementing antiques acquired from the market so as not to ruin the essential value of the historical materials. In order to facilitate an accurate understanding of the setup of this gallery, visitors are provided with a pamphlet illustrating the items considered to be original.

In literature dating from Pompon's time, when people of the time talk about Pompon's works, they almost always refer to the studio and the artist himself. Having studied these documents, I feel these facts cannot be disregarded. Now that our museum has taken over these historical materials, "The Sculptor's Studio" will continue to be utilized in various ways as a place to learn about Pompon's life and works and as a present-day location to broadly deepen our understanding of sculpture and artists.

*Some materials mentioned in this paper are not llustrated here.

Translation: Ogawa Kikuko

Notes:

1 The works by François Pompon in our collection are listed in the following database:
https://jmapps.ne.jp/tatebayashi/sakka_det.html?list_count=10&person_id=1
Research on his works and major archival materials are compiled in the following publication: Matsushita Kazumi and Kamio Reiko, *Studies on François Pompon—From the Collection of Works and Archival Materials at the Gunma Museum of Art, Tatebayashi* [in Japanese] (Gunma Museum of Art, Tatebayashi, 2021).

2 Catherine Chevillot, Liliane Colas, and Anne Pingeot, *François Pompon 1855-1933* (Réunion des musées nationaux, 1994), 91-92; Véronique Van de Ponseele, "Muséum national d'histoire naturelle," in *François Pompon* (Dijon: Éditions Faton, 2020), 84-85.

3 See Note 2.

4 A photograph taken in front of a café on Rue des Francs-Bourgeois. Mr. Dayet in this photograph was the model for *Mr. D* (1879, submitted to the Salon) in our collection.

5 Paul Liger-Belair, "Idéal et Technique: La statuaire animalier François Pompon," *L'ESSOR,* 5e cahier (1930): 4.

6 The dedication reads, "FLEUR D'AMOUR de la basse Rannée, a mon ami Chardelle F Pompon 1931."

7 This was the work Pompon's father submitted to be authorized as a carpenter.

Liste des archives François Pompon (photographies, mobilier, objets)

No.	Titre	Photographe	Date	Dimension (H x L)
Photographies				
PH_A	**Photographies de l'atelier de François Pompon**			
PH_A_01	Atelier de François Pompon, 3 rue Campagne-Première, Paris (1)	Roseman	1933	22.9 × 16.8
PH_A_02	Atelier de François Pompon, 3 rue Campagne-Première, Paris (2)	Roseman	1933	22.5 × 16.8
PH_A_03	Atelier de François Pompon, 3 rue Campagne-Première, Paris (3)	Roseman	1933	17.5 × 23.1
PH_A_04	Atelier de François Pompon, 3 rue Campagne-Première, Paris (4)	Roseman	1933	17.2 × 22.7
PH_A_05	Atelier de François Pompon, 3 rue Campagne-Première, Paris (5)	Roseman	1933	16.6 × 23.1
PH_A_06	Atelier de François Pompon, 7 rue Campagne-Première, Paris (1)	Roseman	1933 (?)	23.0 × 29.0
PH_A_07	Atelier de François Pompon, 7 rue Campagne-Première, Paris (2)	Roseman	1933 (?)	22.5 × 28.6
PH_A_08	Atelier de François Pompon, 7 rue Campagne-Première, Paris (3)	Roseman (?)	1933 (?)	18.0 × 23.8
PH_A_09	Atelier de François Pompon reconstitué au Muséum nationale d'histoire naturelle, Paris	Gabriel	1934	16.5 × 23.5
PH_A_10	Sculptures et outils de François Pompon			11.5 × 17.5
PH_A_11	Objets de l'atelier de François Pompon entreposés chez Demeurisse à Soucy (1)		1994	30.3 × 20.2
PH_A_12	Objets de l'atelier de François Pompon entreposés chez Demeurisse à Soucy (2)		1994	30.3 × 20.2
PH_A_13	Objets de l'atelier de François Pompon entreposés chez Demeurisse à Soucy (3)		1994	30.3 × 20.2
PH_A_14	Objets de l'atelier de François Pompon entreposés chez Demeurisse à Soucy (4)		1994	30.3 × 20.2
PH_A_15	Objets de l'atelier de François Pompon entreposés chez Demeurisse à Soucy (5)		1994	30.3 × 20.2
PH_A_16	Objets de l'atelier de François Pompon entreposés chez Demeurisse à Soucy (6)		1994	30.3 × 20.2
PH_A_17	Objets de l'atelier de François Pompon entreposés chez Demeurisse à Soucy (7)		1994	30.3 × 20.2
PH_A_18	Objets de l'atelier de François Pompon entreposés chez Demeurisse à Soucy (8)		1994	30.3 × 20.2
PH_A_19	Objets de l'atelier de François Pompon entreposés chez Demeurisse à Soucy (9)		1994	30.3 × 20.2

PH_A_20	Objets de l'atelier de François Pompon entreposés chez Demeurisse à Soucy (10)		1994	30.3	×	20.2
PH_A_21	Jeanne Demeurisse chez elle à Soucy devant des objets de l'atelier de François Pompon			30.3	×	20.2
PH_A_22	Objets de l'atelier de François Pompon et peinture de René Demeurisse (1)			29.7	×	21.0
PH_A_23	Objets de l'atelier de François Pompon et peinture de René Demeurisse (2)			29.7	×	21.0
PH_A_24	Objets de l'atelier de François Pompon dans des vitrines chez Demeurisse (1)			12.7	×	18.8
PH_A_25	Objets de l'atelier de François Pompon dans des vitrines chez Demeurisse (2)			12.7	×	18.8

PH_B	**Photographies représentant François Pompon**					
PH_B_01	François Pompon devant une église			10.5	×	7.4
PH_B_02	Portrait de François Pompon	Bernès, Marouteau & Cie.	avant 1925	15.7	×	10.7
PH_B_03	François Pompon devant l'Ours blanc sculpté par Jean Joachin Supéry		1928-29	16.2	×	11.1
PH_B_04	François Pompon devant chez lui		vers 1930	14.0	×	8.9
PH_B_05	François Pompon dans son atelier du 7 rue Campagne-Première à Paris		24 mai 1932	8.9	×	6.3
PH_B_06	François Pompon avec des connaissances dans son atelier du 7 rue Campagne-Première à Paris (1)		24 mai 1932	8.9	×	6.3
PH_B_07	François Pompon avec des connaissances dans son atelier du 7 rue Campagne-Première à Paris (2)		24 mai 1932	8.9	×	6.3
PH_B_08	François Pompon modelant Henry Deschamps		septembre 1932	10.8	×	6.4
PH_B_09	François Pompon avec le pigeon Nicolas			22.0	×	16.1
PH_B_10	François Pompon modelant Stapzla		1933	17.1	×	11.9
PH_B_11	François Pompon en extérieur			3.4	×	5.4

PH_C	**Photographies de personnages et de paysages**					
PH_C_01	Photographie de groupe devant un café, rue Franc Bourgeois à Paris			20.3	×	26.2
PH_C_02	Amis de François Pompon (1)		2 septembre 1925	8.0	×	5.1

PH_C_03	Amis de François Pompon (2)	25 novembre 1925	8.2	×	8.3
PH_C_04	Amis de François Pompon (3)		5.1	×	7.8
PH_C_05	Femme tenant un cheval par la bride		5.1	×	7.8
PH_C_06	Deux femmes (1)		3.4	×	5.5
PH_C_07	Deux femmes (2)		3.4	×	5.5
PH_C_08	Deux femmes (3)		3.3	×	5.3
PH_C_09	Fermiers à Cuy-Saint-Fiacre (1)		4.4	×	6.8
PH_C_10	Fermiers à Cuy-Saint-Fiacre (2)		5.1	×	7.8
PH_C_11	Paysage de ferme à Cuy-Saint-Fiacre (1)		5.8	×	8.3
PH_C_12	Paysage de ferme à Cuy-Saint-Fiacre (2)		5.8	×	8.3
PH_C_13	Paysage de ferme à Cuy-Saint-Fiacre (3)		5.8	×	8.3
PH_C_14	Paysage de ferme à Cuy-Saint-Fiacre (4)		7.8	×	5.1
PH_C_15	René Demeurisse devant la pratique de l'Ours blanc pour Anvers	1954	5.6	×	5.6
PH_C_16	Jeanne Demeurisse dans sa maison à Soucy	1970-1975	13.0	×	17.7

PH_D	**Photographies d'animaux**				
PH_D_01	Lions au zoo de l'exposition coloniale internationale de Paris (1)	1931	12.0	×	16.9
PH_D_02	Lions au zoo de l'exposition coloniale internationale de Paris (2)	1931	13.9	×	9.0
PH_D_03	Lions au zoo de l'exposition coloniale internationale de Paris (3)	1931	9.0	×	13.8
PH_D_04	Lions au zoo de l'exposition coloniale internationale de Paris (4)	1931	9.0	×	13.9
PH_D_05	Biches et cerf au Jardin des Plantes à Paris (1)		3.4	×	5.0
PH_D_06	Biches et cerf au Jardin des Plantes à Paris (2)		3.4	×	5.0
PH_D_07	Cerf au Jardin des Plantes à Paris (1)		3.4	×	5.0

PH_D_08	Cerf au Jardin des Plantes à Paris (2)			3.4	×	5.0
PH_D_09	Cerf au Jardin des Plantes à Paris (3)			3.4	×	5.0
PH_D_10	Cerf avec des chiens de chasse			12.0	×	16.5
PH_D_11	Rhinocéros			7.7	×	10.7
PH_D_12	Rhinocéros			15.0	×	19.6
PH_D_13	Cochon			5.1	×	8.0
PH_D_14	Bélier			8.2	×	12.4
PH_D_15	Jument et son poulain (ou sa pouliche)			12.5	×	12.0
PH_D_16	Vache et sa génisse			14.2	×	10.0
PH_D_17	Boston-Terrier Toy			7.8	×	10.6
PH_D_18	Chiens			11.0	×	16.7
PH_D_19	Canards			11.4	×	17.8
PH_D_20	Volailles			11.5	×	18.2
PH_D_21	Dindons sauvages			11.3	×	18.1
PH_D_22	Cygne et canards			9.8	×	14.1
PH_D_23	Coq			11.9	×	17.2
PH_D_24	Volailles			16.2	×	22.3

PH_E	**Photographies des œuvres de François Pompon - Figures, oiseaux**		(année d'exécution de l'œuvre)			
PH_E_001	*Cosette* (plâtre)	Bernès, Marouteau & Cie.		23.0	×	16.9
PH_E_002	*Cosette* (plâtre)		(1888)	25.3	×	17.0
PH_E_003	*Cosette* (plâtre)			17.7	×	12.5
PH_E_004	*Henry Deschamps* (bronze)		(1932)	22.2	×	16.5

PH_E_005	*Henry Deschamps* (bronze)		(1932)	22.4	×	16.2
PH_E_006	*Masque d'enfant* (terre cuite)		(1891)	23.8	×	17.8
PH_E_007	*Femme au corset relevant sa chemise* (bronze)			25.5	×	20.3
PH_E_008	*Monument aux morts de Cuy-Saint-Fiacre* (maquette en plâtre)		vers 1989 (1919-1921)	28.9	×	20.0
PH_E_009	*Berthe Pompon* (plâtre)			21.5	×	17.9
PH_E_010	*Berthe Pompon* (plâtre)			29.1	×	20.0
PH_E_011	*Claudine Pompon*			24.0	×	17.9
PH_E_012	*Claudine Pompon* (bronze)	Bernès, Marouteau & Cie.		23.3	×	16.8
PH_E_013	*Claudine Pompon* (bronze)	Bernès, Marouteau & Cie.		17.5	×	11.0
PH_E_014	*Tête d'homme*			13.0	×	10.3
PH_E_015	*Ara* (pierre)	Roseman	(1930)	22.7	×	16.5
PH_E_016	*Ara battant des ailes*	Roseman	(1933)	21.5	×	14.7
PH_E_017	*Canard*, bas-relief (plâtre)		(1907)	24.1	×	17.8
PH_E_018	*Canard*, bas-relief (plâtre)	Bernès, Marouteau & Cie.	(1907)	17.5	×	22.8
PH_E_019	*Canard* (plâtre)			15.0	×	9.8
PH_E_020	*Canard appelant* (terre cuite)		1884	23.4	×	17.8
PH_E_021	*Canard sur l'eau tête levée* (bronze)			20.4	×	25.3
PH_E_022	*Chouette* (bronze)			24.3	×	18.0
PH_E_023	*Chouette yeux saillants* (plâtre)			28.9	×	19.9
PH_E_024	*Chouette* (bronze)			25.3	×	20.5
PH_E_025	*Grand Duc* (plâtre)	Roseman		23.3	×	16.5
PH_E_026	*Grand Duc* (bronze)			23.9	×	17.6
PH_E_027	*Condor* (bronze)	Bernès, Marouteau & Cie.		23.5	×	17.5

PH_E_028	*Condor* (bronze)	Bernès, Marouteau & Cie.		23.3	×	17.4
PH_E_029	*Condor* (bronze)			27.6	×	23.5
PH_E_030	*Condor* (bronze)			27.7	×	23.5
PH_E_031	Tombeau de Berthe Pompon surmonté du *Condor*			10.4	×	7.6
PH_E_032	*Coq* (bronze)		(1927)	22.2	×	16.7
PH_E_033	*Coq de combat* (plâtre)	Bernès, Marouteau & Cie.	(1923-1924)	23.0	×	16.9
PH_E_034	*Coq de combat* (plâtre)	Roseman	(1923-1924)	23.8	×	16.5
PH_E_035	*Coq de combat* (plâtre)	Roseman	(1923-1924)	23.7	×	17.0
PH_E_036	*Coq dormant* (plâtre)	Marc Vaux		10.7	×	16.6
PH_E_037	*Coq dormant* (plâtre)	Marc Vaux		10.5	×	16.0
PH_E_038	*Coq de girouette*	Chevojon	(1908-1932)	17.0	×	22.5
PH_E_039	*Coq de girouette* (tête)		(1924)	10.7	×	18.0
PH_E_040	*Coq indien* (bronze)		(1924-1929)	11.9	×	16.3
PH_E_041	*Coq indien* (bronze)	Bernès, Marouteau & Cie.	(1924-1929)	17.5	×	22.9
PH_E_042	*Corbeau* (bronze)	Roseman	(1928-1929)	22.0	×	17.0
PH_E_043	*Corbeau* (plâtre)		(1928-1929)	12.2	×	16.3
PH_E_044	*Dindon* (bronze)		(1925)	23.5	×	16.6
PH_E_045	*Grue couronnée au repos* (bronze)	Roseman	(1925)	23.0	×	16.0
PH_E_046	*Grue couronnée au repos* (bronze)		(1925)	22.6	×	15.7
PH_E_047	*Marabout* (plâtre)			16.9	×	12.0
PH_E_048	*Oie* (bronze)			23.9	×	17.8
PH_E_049	*Oie* (bronze)			23.9	×	17.7
PH_E_050	*Oie* (bronze)			23.8	×	17.7

PH_E_051	*Paon* (bronze)			20.2	×	25.6
PH_E_052	*Pélican* (bronze)	Gabriel	(1924)	23.5	×	17.7
PH_E_053	*Pélican* (bronze)	Roseman		22.5	×	16.9
PH_E_054	*Pélican* (plâtre)	Bernès, Marouteau & Cie.		16.5	×	11.1
PH_E_055	*Pélican* (plâtre)	Bernès, Marouteau & Cie.		16.5	×	11.1
PH_E_056	*Pélican* (bronze)	Bernès, Marouteau & Cie.		22.3	×	17.0
PH_E_057	*Pélican* (bronze)			16,5	×	11.5
PH_E_058	*Perdreau rouge* (plâtre)			10.4	×	8.0
PH_E_059	*Perruche* (marbre)	Bernès, Marouteau & Cie.	(1933)	23.4	×	15.3
PH_E_060	*Perruche* (marbre)		(1933)	17.3	×	10.5
PH_E_061	*Pigeon boulant*	Vizzanova	(1927)	17.5	×	12.7
PH_E_062	*Pigeon Nicolas*	Bernès, Marouteau & Cie.		17.4	×	22.9
PH_E_063	*Pigeon Nicolas*	Bernès, Marouteau & Cie.		17.4	×	23.0
PH_E_064	*Pigeon Nicolas*			12.0	×	16.8
PH_E_065	*Petit Pigeon* (plâtre)	Bernès, Marouteau & Cie.	(1926 – 1927)	21.6	×	17.5
PH_E_066	*Petit Pigeon* (plâtre)			12.0	×	16.9
PH_E_067	*Pigeon au nid coupé* (plâtre)			16.0	×	20.0
PH_E_068	*Tourterelle* (bronze)			22.3	×	16.5
PH_E_069	*Tourterelle* (bronze)			22.3	×	16.6
PH_E_070	*Poule d'eau* (plâtre)	Bernès, Marouteau & Cie.		17.0	×	22.9
PH_E_071	Bibliothèque de Pierre-Paul Montagnac surmontée d'une *Poule d'eau* de François Pompon		1923	16.8	×	23.0
PH_E_072	*Poule d'eau* (bronze)			25.2	×	20.3
PH_E_073	*Poule d'eau* (plâtre peint)			14,3	×	9.3

PH_E_074	*Poule d'eau* (plâtre peint)			9.9	×	15.1
PH_E_075	*Faisan* (bronze)			20.3	×	25.3
PH_E_076	*Faisan* (bronze)	Michel Wirth		12.7	×	18.0

PH_F	**Photographies des œuvres de François Pompon - quadrupèdes**					
PH_F_001	*Bison* (bronze)		(1907)	11.0	×	15.5
PH_F_002	*Bison* (bronze)		(vers 1928)	16.6	×	22.5
PH_F_003	*Bison* (bronze)		(vers 1928)	16.6	×	22.4
PH_F_004	*Grand Cerf* (terre)	Bernès, Marouteau & Cie.	(1928)	22.5	×	17.0
PH_F_005	*Grand Cerf* (plâtre)		(1929)	23.0	×	16.2
PH_F_006	*Grand Cerf* (plâtre)		(1929)	22.8	×	15.4
PH_F_007	*Grand Cerf* (plâtre)		(1929)	22.8	×	15.4
PH_F_008	*Grand Cerf* (terre)		(1929)	15.2	×	10.4
PH_F_009	*Grand Cerf* (plâtre)	Bernès, Marouteau & Cie.	(1929)	16.9	×	11.7
PH_F_010	*Grand Cerf* (plâtre)	Bernès, Marouteau & Cie.	(1929)	16.8	×	11.9
PH_F_011	*Grand Cerf* (plâtre)	Bernès, Marouteau & Cie.	(1929)	16.8	×	11.6
PH_F_012	*Grand Cerf* (plâtre)	Roseman	(1929)	23.4	×	17.0
PH_F_013	*Grand Cerf* (plâtre)	Roseman	(1929)	16.7	×	10.2
PH_F_014	*Grand Cerf* (bronze)	Roseman	(1929)	17.3	×	12.0
PH_F_015	*Grand Cerf* (bronze)	Roseman	(1929)	17.3	×	11.9
PH_F_016	*Grand Cerf* (bronze)		(1929)	22.1	×	15.8
PH_F_017	*Grand Cerf* présenté au Grand Palais à l'occasion du Salon d'automne	Marc Vaux	(1929)	22.6	×	16.3
PH_F_018	*Poulain* (plâtre)		(1930)	6.0	×	8.0

PH_F_019	*Chien Basset Toc* (bronze)			17.7	×	12.6
PH_F_020	*Lévrier Stapzla debout* (plâtre)	Roseman	(1932)	11.5	×	16.7
PH_F_021	*Boston-Terrier, Toy* (plâtre)	Marc Vaux	(1930-1932)	12.2	×	16.1
PH_F_022	*Cochon du Yorkshire* (plâtre)			13.0	×	17.8
PH_F_023	*Cochon du Yorkshire* (bronze)			16.6	×	22.3
PH_F_024	*Cochon du Yorkshire* (bronze)			11.0	×	16.5
PH_F_025	*Goret* (bronze)			16.5	×	22.3
PH_F_026	*Goret* (bronze)			16.5	×	22.3
PH_F_027	*Goret* (bronze)			16.5	×	22.3
PH_F_028	*Goret* (bronze)			15.6	×	23.6
PH_F_029	*Truie et ses petits* (pierre)			16.9	×	22.9
PH_F_030	*Truie et ses petits* (pierre)	Bernès, Marouteau & Cie.		16.4	×	23.4
PH_F_031	*Truie* (bronze)			12.6	×	17.7
PH_F_032	*Dromadaire* (plâtre)			16.5	×	22.2
PH_F_033	*Dromadaire* (plâtre)			10.8	×	16.4
PH_F_034	*Éléphant* (plâtre)	Marc Vaux	(1933)	11.1	×	16.6
PH_F_035	*Éléphant* (bronze)	Rudomine		23.6	×	29.8
PH_F_036	*Éléphant* (bronze)	Rudomine		23.7	×	29.7
PH_F_037	Ancienne présentation de *l'Hippopotame* (plâtre)	Marc Vaux		16.7	×	22.8
PH_F_038	Ancienne présentation de *l'Hippopotame* (plâtre)	Marc Vaux		16.7	×	22.8
PH_F_039	Ancienne présentation de *l'Hippopotame* (plâtre)	Marc Vaux		16.7	×	22.8
PH_F_040	Ancienne présentation de *l'Hippopotame* au Muséum nationale d'histoire naturelle, Paris	Roseman	Après 1934 (1931)	22.9	×	16.6
PH_F_041	Ancienne présentation de *l'Hippopotame* au Muséum nationale d'histoire naturelle, Paris	Gabriel	Après 1934 (1931)	23.7	×	17.6

PH_F_042	*Tête d'Orang-Outang* (marbre noire)	Roseman	(1930)	14.7	×	15.9
PH_F_043	*Ours blanc* (plâtre)	Bernès, Marouteau & Cie.	(1922)	16.2	×	22.2
PH_F_044	*Ours blanc* (plâtre)	Bernès, Marouteau & Cie.	(1922)	15.8	×	22.9
PH_F_045	*Ours blanc* (plâtre)	Bernès, Marouteau & Cie.	(1922)	16.8	×	21.8
PH_F_046	*Ours blanc* (plâtre)			17.6	×	12.5
PH_F_047	*Panthère mouchetée (tête)*	Bernès, Marouteau & Cie.	(1921)	22.8	×	16.8
PH_F_048	*Panthère mouchetée* (plâtre)	Bernès, Marouteau & Cie.	(1924-1930)	10.8	×	16.6
PH_F_049	*Panthère mouchetée* (plâtre)	Bernès, Marouteau & Cie.	(1924-1930)	10.8	×	16.6
PH_F_050	*Panthère noire* (bronze)		(1925)	16.5	×	22.3
PH_F_051	*Panthère noire* (bronze)		(1925)	16.5	×	22.3
PH_F_052	*Rhinocéros* (plâtre)	Marc Vaux	(1928)	11.5	×	16.8
PH_F_053	*Rhinocéros* (bronze)			17.8	×	24.0
PH_F_054	*Sanglier* (sur potence)	Bernès, Marouteau & Cie.		15.4	×	22.9
PH_F_055	*Sanglier* (sur potence)	Bernès, Marouteau & Cie.		11.2	×	15.5
PH_F_056	*Sanglier* (plâtre)			9.8	×	15.0
PH_F_057	*Bœuf enrubanée* (plâtre)	Roseman	(1930)	12.1	×	16.5
PH_F_058	*Bœuf enrubanée* (plâtre)		(1930)	17.0	×	23.7
PH_F_059	Dessin du vaux (reproduction d'une page d'un carnet de dessins de François Pompon)	Roseman		11.5	×	16.9
PH_F_060	*Génisse* (plâtre)			11.7	×	17.1
PH_F_061	*Taureau* (bronze)	Georges Allie	(1922)	14.6	×	20.5
PH_F_062	*Taureau* (bronze)	Georges Allie	(1922)	14.5	×	20.5
PH_F_063	*Grand Taureau* (terre) avec fer de soutien	Roseman	(1931)	16.5	×	22.5
PH_F_064	*Grand Taureau* (terre)	Roseman	(1932)	16.2	×	22.7

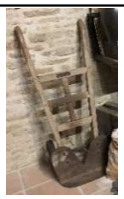
PH_F_065	*Grand Taureau* (plâtre)	Roseman		12.6	×	17.3
PH_F_066	*Grand Taureau* (plâtre)	Roseman		12.6	×	17.5
PH_F_067	*Grand Taureau* (plâtre)	Roseman		12.5	×	17.5
PH_F_068	*Grand Taureau* à l'atelier du fondeur Andro	Roseman	1933	21.4	×	28.3
PH_F_069	*Grand Taureau* (bronze)	Roseman	(1933)	19.6	×	26.5
PH_F_070	*Grand Taureau* au Square Pompon à Saulieu		(1949)	9.5	×	14.3
PH_F_071	*Grand Taureau* (bronze)	Bernès, Marouteau & Cie.		16.5	×	11.0
PH_F_072	*Grand Taureau* (bronze)			8.9	×	12.7
PH_F_073	*Vache Fleur d'Amour* (terre)	Bernès, Marouteau & Cie.	(1927)	17.4	×	22.8
PH_F_074	*Vache Fleur d'Amour* (plâtre)	Marc Vaux	(1927)	17.1	×	22.4
PH_F_075	*Vache Fleur d'Amour* (plâtre peint)	Marc Vaux	(1927)	16.2	×	22.5
PH_F_076	*Vache Fleur d'Amour* (plâtre peint)	Marc Vaux	(1927)	17.2	×	22.7
PH_F_077	*Tigresse jouant* (plâtre)		(1927-1926)	11.0	×	16.8
PH_F_078	*Taupe* (?)	Michel Wirth		12.7	×	17.9

PH_G	**Photographies de combinaisons d'œuvres**					
PH_G_001	*Hyène* et *Hippopotame*			18.0	×	24.2
PH_G_002	*Biche de l'Inde* et *la tête de Panthère noire*			18.0	×	24.2
PH_G_003	*Coq de Combat* et *Coq* pour *le Monument aux morts*			16.5	×	22.1
PH_G_004	*Corbeau* et *Poule*			16.5	×	22.2
PH_G_005	*Marabout, Cygne, Grue couronée*			16.5	×	22.2
PH_G_006	*Fusain doré* et *Goret*			15.2	×	11.2
PH_G_007	*Tête de Lucien Maugey, Dromadaire, Pigeonne au nid cylindrique, Coq picorant*			15.1	×	23.0

PH_G_008	*Escargot, (?), Coq dormant queue dressée, Tête de Loup, Poulet Nouveau né, œuf brisé*			22.0	×	16.4
PH_G_009	*Truie* et *Goret*	Claude Alexandre		12.7	×	17.9

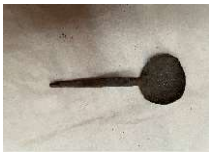
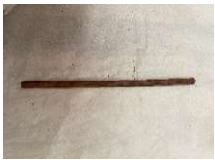
PH_H	**Photographies (autres)**					
PH_H_01	Esquisse du *Baiser* d'Auguste Rodin			22.4	×	16.5
PH_H_02	*Portrait du sculpteur Pompon* par René Demeurisse		(1923)	27.8	×	21.8
PH_H_03	*Portrait de Pompon* (peinture anonyme)			8.0	×	5.5
PH_H_04	Album de l'exposition A. de La Patellière et François Pompon		1942	39.5	×	32.5

	No.	Titre	Prove-nance	Matière	H × L × P (cm)
	Mobilier, Objets		＊Pièces originales issues de l'atelier de François Pompon		
	MO_01	Maquette d’escalier en bois réalisée par Alban Pompon	＊	Bois	24.2 × 15.3 × 15.3
	MO_02	Planisphère Babinet	＊	Papier	97.0 × 128..0
	MO_03	Pendule à coucou	＊	Bois	17.5 × 12.4 × 11.5
	MO_04	Vis de pressoir à cidre	＊	Bois	228.0 × 19.5 × 21.0
	MO_05	Réplique du bas-relief de la Bataille de Marignan du tombeau de François Ier par Pierre Bontemps	＊	Plâtre	42.0 × 167.0 × 5.5
	MO_06	Établi de menuisier	＊	Bois	80.5 × 42.0 × 141.0
	MO_07	Étagère	＊	Bois	128.0 × 168.0 × 20.0
	MO_08	Fourneau de cuisine		Fer	78.5 × 54.0 × 83.0
	MO_09	Chaise		Bois	123.5 × 56.0 × 54.0

	MO_10	Chaise	*	Bois, rotin	84.5	×	40.5	×	42.0
	MO_11	Fauteuil	*	Bois, étoffe	92.0	×	58.0	×	62.0
	MO_12	Tabouret	?	Bois, cordage de chanvre	77.5	×	33.5	×	33.5
	MO_13	Porte-valise pliable	?	Bambou	70.0	×	48.0	×	58.5
	MO_14	Coffret en bois	?	Bois, métal	24.5	×	44.5	×	16.5
	MO_15	Boîte à outils	?	Bois, métal	20.5	×	29.1	×	5.0
	MO_16	Boîte d’objets personnels	*	Bois	9.2	×	33.0	×	19.0
	MO_17	Rangement	?	Bois	56.5	×	24.0	×	27.6
	MO_18	Brouette	?	Bois, fer	105.5	×	47.0	×	46.0

	MO_19	Sabots		Bois	11.0	×	30.9	×	11.7
	MO_20	Broc	?	Métal	50.0	×	25.0	×	26.0
	MO_21	Pot en terre cuite	?	Terre cuite	28.9	×	10.1	×	12.8
	MO_22	Cendrier	*	Poterie	13.5	×	19.7	×	13.3
	MO_23	Cendrier		Poterie	11.4	×	20.6	×	15.1
	MO_24	Assiette en plâtre		Plâtre			φ 21.2	×	2.8
	MO_25	Marbre réalisé par un compagnon du devoir	*	Marbre	9.8	×	φ 12.3		
	MO_26	Fossile	*	Fossile	9.0	×	φ 10.5		
	MO_27	Moulage dentaire	*	Plâtre	12.4	×	20.0	×	7.0

	MO_28	Corne de chèvre	*	Corne	2.6	×	14.2	×	6.3
	MO_29	Corne de chèvre	*	Corne	2.1	×	14.8	×	6.8
	MO_16	**Contenu de la boîte d'objets personnels**							
	MO_16_01	Burin		Bois, métal	3.3	×	12.0	×	3.3
	MO_16_02	Burin		Bois, métal	3.0	×	11.5	×	3.0
	MO_16_03	Crayon en fer		Bois, métal	1.0	×	17.5		
	MO_16_04	Crayon en fer		Bois, métal	0.7	×	18.5		
	MO_16_05	Morceaux de bois		Bois	5.0 ～8.2				
	MO_16_06	Pièce métallique		Métal	10.5	×	2.2		
	MO_16_07	Pinces		Métal	1.2	×	6.2	×	0.8

	MO_16_08	Pièce métallique	Métal	2.5	×	9.0	×	4.0
	MO_16_09	Outil (?)	Métal	2.0	×	9.8	×	4.0
	MO_16_10	Boulons, écrous, rondelle	Métal	boulons, écrous : 4.4～9.2×0.7～1.0 rondelle : φ 1.2, 1.5				
	MO_16_11	Fil de fer	Métal	3.5	×	5.5		
	MO_16_12	Crayon	Bois	0.6	×	17.5		
	MO_16_13	Crayons de couleur	Bois, couleur	5.7 ～ 10.8				
	MO_16_14	Couleurs Sans Danger	Couleurs d'aquarelle	0.4 ～0.5	×	2.5	×	1.0
	MO_16_15	Morceau de plomb	Plomb	1.0	×	8.0	×	7.8
	MO_16_16	Moulage d’insecte	Plomb	1.2	×	3.5	×	3.5

	MO_16_17	Moulage d’insecte	Plomb	1.5	×	5.8	×	3.8
	MO_16_18	Porte-monnaie	Tissu, métal	20.5	×	13.5		
	MO_16_19	Porte-monnaie	Tissu, métal	6.5	×	10.5		
	MO_16_20	Étui à lunettes	Cuir	5.7	×	10.0		
	MO_16_21	Binocle	Verre, métal	5.5	×	9.5		
	MO_16_22	Petit sabot	Bois	5.5	×	13.0	×	5.5
	MO_16_23	Bouton de manchette	Bois, métal	2.0	×	2.5	×	2.0
	MO_16_24	Plaque de nom	Métal	1.2	×	7.2		
	MO_16_25	Boîte de réglisse Florent	Papier	2.0	×	7.3		

	MO_16_26	Pains à cacheter d'Adrien Maurin	Papier	1.8	×	φ 6.0		
	MO_16_27	Boîte ronde	Papier	2.0	×	φ 6.0		
	MO_16_28	Pains à cacheter de N. Antoine & Fils	Papier	2.0	×	φ 6.5		
	MO_16_29	Boîte	Papier	1.4	×	11.2	×	2.2
	MO_16_30	Pièce de 10 centimes, franc Germinal	Cuivre			φ 3.0		
	MO_16_31	Plaque métallique	Métal			φ 2.2		
	MO_16_32	Boîte de cigarette contenant des anneaux métalliques	Métal, papier	2.1	×	8.5	×	4.5
	MO_16_33	Griffe d'animal (?)	Griffe (?)	2.0	×	5.5		
	MO_16_34	Fume-cigarette (?)	Bakélite (?)	9.6	×	1.0		

Relecture du français, Claire Balay

群馬県立館林美術館　研究紀要　第 6 号

編集　群馬県立館林美術館
〒374-0076 群馬県館林市日向町 2003
Tel. 0276-72-8188

発行　群馬県立館林美術館
令和 6 年 3 月

Bulletin of Gunma Museum of Art, Tatebayashi, no.6

Edited by
Gunma Museum of Art, Tatebayashi
Hinata-cho 2003, Tatebayashi, Gunma, JAPAN
Tel. +81-276-72-8188

Published by
Gunma Museum of Art, Tatebayashi
March 2024

© 2024 Gunma Museum of Art, Tatebayashi